

平成30年度リージョナルシアター事業
Regional Theatre Projects

事業報告書



目次

はじめに	3
事業概要	4
派遣アーティストプロフィール	6
事業の流れ	7
各地のワークショップ・トピック	8
西和賀町文化創造館 （岩手県西和賀町）	10
アーティストレポート ごまのはえ	15
牛久市中央生涯学習センター （茨城県牛久市）	16
アーティストレポート 多田淳之介	21
公益財団法人東松山文化まちづくり公社 （埼玉県東松山市）	22
アーティストレポート 有門正太郎	27
秩父宮記念市民会館 （埼玉県秩父市）	28
アーティストレポート 有門正太郎	33
魚沼市小出郷文化会館 （新潟県魚沼市）	34
アーティストレポート 田上豊	39
小牧市市民会館 （愛知県小牧市）	40
アーティストレポート 福田修志	45
ゆめたろうプラザ （愛知県武豊町）	46
アーティストレポート 田上豊	51
鈴鹿市文化会館 （三重県鈴鹿市）	52
アーティストレポート 福田修志	57
岡山県天神山文化プラザ （岡山県）	58
アーティストレポート 多田淳之介	63

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携のもと、全国の地方公共団体や関連の公益法人などが実施する文化・芸術活動に対し支援を行うほか、財団の自主事業として、研修交流事業、公立文化施設活性化推進、調査研究等の事業に取り組んでいます。

平成26年度からはじまった本事業は、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに最大3回派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、小学校へ出向き授業時間を使ってのアウトリーチ、文化施設の役割や取り組みについて市民に広く知っていただくキッカケにするための公募ワークショップ、地元演劇人に向けてのファシリテーター養成講座など、多彩なプログラムとなりました。

この報告書は、「平成30年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

平成31年3月
一般財団法人 地域創造

事業概要

1 趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2 対象団体

①地方公共団体

②地方自治法第244条の2第3項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体。

③地域における芸術文化活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの。

3 事業内容

派遣された演劇の表現者（演出家、以下派遣アーティスト）と協働して地域や対象団体の課題やビジョンを元に事業を企画し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

（1）プログラムの実施時間

計840分のプログラムを実施します。

（2）派遣回数

最大3回の派遣を行います。1回目は打合せや内部の研修、アウトリーチ先の下見に充てます。残り2回でプログラムを実施しますが、連続した日程にするなど派遣回数を計2回とする場合は、2回目が原則5泊6日になります。

【実施時間の考え方】

〈プログラムの実施時間〉

1回目の下見を除いた派遣において計840分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、参加団体と地域創造、アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

〈学校でのアウトリーチについて〉

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、1コマの時間は、小学校では45分×2時限（90分）、中学・高校等では50分×2時限（100分）を最小限とします。また、1コマの対象人数は1クラス約30人を目安にしています。

4 支援措置

（1）一般財団法人地域創造が負担する経費

①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストにかかる研修会及び、下見、プログラム実施にかかる派遣3回分までの

経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。アウトリーチを実施する場合のアシスタント2名分の経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。

（2）参加団体が負担する経費

①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）は、参加団体の負担になります。

②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、消耗品等）は、参加団体の負担となります。

③その他

規定の時間や日数を超える分の別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となります。参加申込書及び実施計画書を考慮の上、決定します。なお、派遣アーティストの指定はできません。

5 プログラムについて

演出家が地域で演劇のワークショップを行うことで、各地域の課題に取り組むことが可能になります。演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に企画していただけます。

派遣アーティスト プロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、実施団体の企画する事業の内容について、実施団体担当者と共に検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

多田 淳之介（演出家・俳優、東京デスロック主宰）



©平岩亨

1976年生まれ、千葉県柏市出身。演出家、俳優。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。青年団演出部。俳優の身体、観客、時間を含めた現象をフォーカスした演出が特徴。古典から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。

富士見市を中心に、他地域、教育機関でのアウトリーチ活動、創作活動も積極的に行い、韓国、フランスでの公演、共同製作など国内外問わず活動する。2010年4月に演劇部門では国内歴代最年少で公共文化施設の芸術監督に就任。2013年韓国で最も権威のある東亜演劇賞にて外国人として初の正賞受賞となる演出賞を受賞。演出作品『ガモメ カルメギ』は作品賞、舞台美術賞も受賞。おもな演出作品に『ロミオとジュリエット』『その人を知らず』『あなた自身のためのレッスン』『LOVE』『再／生』など。現在、四国学院大学非常勤講師。

田上 豊（劇作家・演出家、田上パル主宰）



1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。2006年、劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、疾風怒濤のテンポと、遊び心満載の演出は「体育会系演劇」とも評される。大学在学中にワークショップデザインを研究し、現在、教育現場を中心に、創造型、体験型のワークショップを全国各地で実施している。演劇部の嘱託顧問や、総合高校での表現科目「演劇」の授業を受け持つなど、教育現場での経験も持つ。高校生、大学生とのクリエーション、リーディング、市民劇団への書き下ろしなど、劇団外での創作活動も展開。現在、富士見市民文化会館キラリふじみアソシエイトアーティスト、青年団演出部所属。

有門 正太郎（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ主宰）



1975年生まれ北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」、泊篤志代表「飛ぶ劇場」を経て、2005年「有門正太郎プレゼンツ」を始動。「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に作、演出も務め全国でワークショップやアウトリーチ活動も行っている。俳優では様々な全国ツアー公演等に参加。高校演劇専科での講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ～チャレンジ！ えんげき～」の総合演出等も務める。役者として主な出演作品、富良野塾公演『今日、悲別で』『走る』（作・演出：倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出：土田英生）『江戸の青空』（作：千葉雅子、演出：G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出：永山智行）など。

福田 修志（劇作家・演出家、F's Company 代表）



1975年生まれ、長崎市出身。長崎大学教育学部卒。1997年にF's Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、以後、作・演出を務める。現代社会の中に潜む人間の弱さを寓話化して描く作風が特徴。長崎市主催の市民参加型舞台にも深く関わり、九州圏内の学校や地域での演劇ワークショップの講師や外部脚本の執筆、地元TVやラジオのCM出演なども行っている。

代表作『マチクイの詩』（第15回日本劇作家協会新人戯曲賞最終選考作品）、2009年度～長崎市自主文化事業『演劇による表現力育成事業』の講師、2011年度文化庁『次代を担う子どもの文化芸術体験事業（派遣事業）』の講師。

ごまのはえ（劇作家・演出家・俳優、ニットキャップシアター代表）



1977年大阪府生まれ。劇作家、演出家、俳優。佛教大学在学中より演劇をはじめ。1999年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。作品には民族楽器の演奏や独自の身体表現が使われ、時に「わかりづらい」といわれる時もあるが元気に活動をつづけている。また近年は「古事記」にあるエピソードをもとに物語をつくっている。2004年『愛のテール』にてOMS 戯曲賞大賞受賞。2005年『ヒラカタノート』にてOMS 戯曲賞特別賞受賞。特技はムックリ。一般社団法人毛帽子事務所所属。

<アドバイザー> 内藤 裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）

岩崎 正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族代表）

事業の流れ

1

全体研修会

平成30年4月16日(月)～17日(火)

2

事業内容の調整・下見の調整

・派遣先への説明、日程調整

3

合意書の締結(三者)

・ワークショップ実施日程、内容
・経費負担の取り決め等

4

下見派遣(原則1泊2日)

派遣アーティストと地域創造担当者が現地を訪問し、打合せと会場下見等を行う。

5

事業内容の再調整・派遣先との調整

6

1回目派遣(原則3泊4日/2回目派遣と合わせて5泊6日も可)

プログラム実施

(派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名)

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ 移動

7

2回目派遣(原則3泊4日)

プログラム実施

(派遣アーティスト×1名、アシスタント×2名、地域創造1～2名)

① 移動・打ち合わせ、② 実施1日目、③ 実施2日目、④ フィードバック・移動

8

事業報告書提出(事業終了後1ヶ月後)

各地のワークショップ・トピック

リージョナルシアター事業は、実施団体とアーティスト、地域創造の三者が対話をしながら地域やホールの課題や展望を鑑みてプログラムを作っていきます。

平成30年度の特徴的なプログラムをご紹介します。

演劇ワークショップの手法や効果を共有するプログラム

事業において協力関係を持ちたいと考える団体や事業実施団体の職員などを対象に演劇の手法によるワークショップの内容や効果を体験できるプログラムを実施することが可能です。教職員、行政職員、事業実施団体職員等を対象としたワークショップが実施されました。



教職員対象ワークショップ（魚沼市）



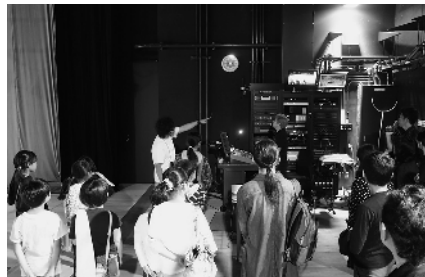
実施団体職員対象ワークショップ（小牧市）

事業実施団体の取り組みやホールの役割を市民に伝えるプログラム

市民が事業や文化施設についての理解を深めたり、これまで繋がりのなかった市民へのアプローチ、また、公演を観るだけではないホールの役割を知っていただくなどの目的で、公募型のワークショップが実施されました。



「ありかどんと探検！」（東松山市）



「市民会館で遊ぼう！」（秩父市）

短期集中による演劇創作プログラム

連続したコマを活用した短期集中での演劇作品の創作プログラムを実施。平日夜間の連続コマと休日昼間の連続コマとの2パターンの短期集中プログラムで、地域に伝わる伝説をモチーフとした作品を制作しました。参加者にとって、プロの演出家のサポートのもと、演劇づくりの楽しさと難しさを体験できたワークショップとなりました。



演出家と演劇づくりをする高校生（武豊町）



ホール野外での作品発表風景（武豊町）

ホールに関わる多様な人たちと地域の文化を考える場づくり

地域の文化の拠点であるホールが地域と良好な関係性を築き、ともに地域の文化について考えていける場づくりプロジェクトとして「岡山シアターミーティング」を実施。交流の薄かった地域へアウトリーチに出たり、ホールに関わる多様な人たち向けのワークショップを行ったりすることで様々な交流が生まれ、地域のニーズを知る良いきっかけとなりました。



演劇・ダンス愛好者のワークショップ体験
(岡山県)



岡山の文化振興ビジョンをみんなで考える
(岡山県)

地域にある資源を活かしたプログラム

地域の伝統工芸品や産業など、地域資源を活用することで、地域の魅力を多くの人に再発見してもらえるようなプログラムを実施。またモノの活用だけでなく、地域で活動する劇団との協働で、将来にわたって継続可能なプログラムづくりを行うなど、地域に密着したワークショップが行われました。



伝統工芸品「鈴鹿墨」を使ったワークショップ
(鈴鹿市)



地域の劇団といっしょに小学校アウトリーチ
(牛久市)

地域の記憶に耳を澄ませ、様々な年代と交流するプログラム

住民が提供してくれた写真から地域の歴史や記憶を紐解き、物語をつくるワークショップを実施。創作に向けたリサーチや、高齢者施設での昔話の聞き取り、完成した戯曲をラジオドラマ化するワークショップなどを通じ、今まで出会う機会がなかった人々をつなぎました。



高齢者施設での聞き取りワークショップ
(西和賀町)



ヘンテコ楽器で劇をつくらうワークショップ
(西和賀町)

西和賀町文化創造館 銀河ホール（岩手県西和賀町）実施データ

実施団体	西和賀町
実施ホール	西和賀町文化創造館 銀河ホール
担当者	小堀陽平、成田紫野
実施期間	下見派遣 平成30年5月21日（月）～5月22日（火） 1回目派遣 平成30年7月31日（火）～8月3日（金） 2回目派遣 平成30年8月20日（月）～8月23日（木）
アーティスト等	アーティスト：ごまのはえ アシスタント：高原綾子、田辺剛（1回目） 高原綾子、池川貴清（2回目） アドバイザー：岩崎正裕（2回目視察）

■下見派遣内容

- 5月21日（月）町内視察（町内公共施設・福祉施設・ホール等）、町民劇場稽古見学
- 5月22日（火）町内視察（温泉旅館等宿泊施設・福祉施設・地域劇団稽古場等）、打ち合わせ

■1回目派遣内容

- 7月31日（火）台本の書き方ワークショップ
- 8月1日（水）台本作成に向けた聞き取りレクチャーワークショップ
高齢者施設での聞き取りワークショップ
- 8月2日（木）台本作成ワークショップ①
台本作成ワークショップ②
- 8月3日（金）フィードバック

■2回目派遣内容

- 8月20日（月）出張発表に向けた準備ワークショップ①（台本の音付け）
- 8月21日（火）出張発表に向けた準備ワークショップ②（台本のリーディングドラマ化）
高齢者施設での出張発表会
ヘンテコ楽器で劇をつくろうワークショップ①「見たことのない楽器で遊んでみよう」
- 8月22日（水）ヘンテコ楽器で劇をつくろうワークショップ②「楽器でお芝居を演じてみよう」
- 8月23日（木）フィードバック

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣			
	5月21日	5月22日	7月31日	8月1日	8月2日	8月3日	8月20日	8月21日	8月22日	8月23日
9:00										フィードバック
10:00	移動	町内視察	移動	聞き取り レクチャーWS 10:30~12:00	台本作成WS① 11:00~12:00	フィード バック	移動	準備WS②（リー ディングドラマ化） 10:30~12:00		
11:00										
12:00										
13:00										
14:00	町内視察	打ち合わせ	高齢者施設 での聞き取 りWS 14:00~16:00	移動	移動	移動	準備WS① （台本の音付け） 16:00~17:00	出張発表会 15:00~16:00		移動
15:00										
16:00										
17:00		移動	台本の書き方WS 16:00~17:00		台本作成WS② 16:00~17:00					
18:00										
19:00	町民劇場稽古 見学									
20:00	交流会							見たことのない 楽器で遊ん でみようWS 19:00~21:00	楽器でお芝 居を演じて みようWS 19:00~21:00	
21:00										

プログラム詳細

台本の書き方ワークショップ

7月31日（火）16：00～17：00

会場：銀河ホール ホワイエ

参加者：9名

一般公募で集まった参加者を対象に、台本の書き方ワークショップを実施。ラジオドラマの収録を前提とした台本の書き方について、質問を交えつつ実践的なレクチャーを受けた。

この回では「『観察』からお話を考える」をテーマに、2枚のイラストから想像を広げて短い物語を創作し、発表を行った。2枚のイラストの前後関係や時間・場所、登場人物の心情や背景など、参加者ごとにさまざまな解釈が生まれており、互いの発表を熱心に聞き合う様子が印象的だった。台本を書くのは初めてという参加者も多く、最初は緊張した様子だったが、レクチャーを受けてからは手元の紙へ積極的にペンを走らせていた。



台本作成に向けた聞き取りレクチャーワークショップ

8月1日（水）10：30～12：00

会場：銀河ホール ホワイエ

参加者：12名

「高齢者施設での聞き取りWS」実施に向けて、WSアシスタントをインタビュー役に取材の練習を行った。参加者はアシスタントが持参した写真から1枚選び、気になった点や興味を持った事柄について質問をしながら、写真にまつわるさまざまなエピソードを引き出していった。中には「事実の確認だけではなく、家族構成や昔の思い出など、個別のエピソードを呼び起こすような有機的な問いかけが効果的である」という複眼的な気づきを得た参加者もいた。

聞き取りの後にはWSアシスタントによるフィードバックの時間が設けられた。質問を受けてみての実感や、投げかけ方に対するアドバイスを受けて、施設での聞き取り実施にあたっての課題を整理することができた。



高齢者施設での聞き取りワークショップ

8月1日（水）14：00～16：00

会場：小規模多機能ホームひなたぼっこ

参加者：14名（施設関係者 約20名）

老人ホームにて聞き取りワークショップを実施。施設関係者を含め総参加者は40名近くにのぼり、大変賑やかで活気あふれる交流の場となった。参加者は事前に「西和賀町にまつわる古写真」に目を通し、数枚をピックアップしてワークショップに参加。写真にまつわる昔語りからさまざまなエピソードを掘り起こし、昭和の時代の西和賀町を浮かび上がらせていった。この日は写真の提供者のうち一人がホームに駆けつけ、いっそう場を盛り上げていた。

輪になって懐かしの写真を囲んだり、お年寄りの隣に寄り添って、語りに真剣に耳を傾けたりと、時代性や年齢を超えた濃密なコミュニケーションが会場のあちこちで生まれていた。WS終了後、別れを惜しんで玄関先まで見送りに来てくれた入居者もあり、充実した対話の時間を過ごすことができた。



プログラム詳細

台本作成ワークショップ

8月2日（木）11：00～12：00、16：00～17：00

会場：銀河ホール ホワイエ

参加者：12名

前日実施の聞き取りWSで得られたエピソードをもとに、ラジオドラマ台本の作成に取り組んだ。アーティストのごまのはえさん・田辺剛さんの指導のもと、台本作成の四つのポイント「言ったこと／言いたいこと（の違い）」「不在者」「デハケ」「後日談」に留意しながら制作にあたった。

最終的には、町内の学生や町外参加者の手により台本5作品が完成した。雪国の暮らしに取材して書かれた「雪の上の花嫁」という作品では、厳しい自然とともに生きる母子の姿が情緒たっぷりに描かれた。ほか、ダム建設による住居移転に題をとった作品や、はじめての修学旅行に浮き足立つ学生たちの姿をコミカルに描く作品など、バラエティ豊かな台本が出揃った。



出張発表会に向けた準備ワークショップ

8月20日（月）16：00～17：00（1回目）

8月21日（火）10：30～12：00（2回目）

会場：銀河ホール ホワイエ

参加者：10名（1回目）／7名（2回目）

「高齢者施設での出張発表会」に向けて、一回目派遣で作成した台本をリーディングドラマとして立ち上げるWSを実施。20日実施のWSでは、世界中のさまざまな民族楽器に触れながら、「悪夢」「初恋」「散歩」というテーマを3グループに分かれて音のみで表現することに挑戦した。それぞれの楽器のもつ音や特性を楽しみながら知ることができた。

21日実施のWSでは、台本2作品のリーディングドラマ化を行った。参加者全員で台本を読み合わせ、どの場面に楽器で音を入れるかを検討した後、チームに分かれて朗読部分と演奏部分それぞれの練習を行った。スコップで雪を握る音を白米の入ったペットボトルで表現し、ときには口笛で雪混じりの風を表現するなど、楽器と参加者の身体を駆使した発想豊かな表現が生まれていた。



高齢者施設での出張発表会

8月21日（火）15：00～16：00

会場：特別養護老人ホームぶなの園

参加者：8名（施設関係者 約30名）

地元のデイサービスセンターで出張発表会を実施。地元になんだ曲の合奏や、リーディングドラマ2作品の上演を行った。台本の朗読には町外（盛岡、神戸）の学生も参加し、若者たちの生き生きとした表現に暖かい拍手が起こっていた。また、合奏にあわせて西和賀町の古写真をスライドショーで流したところ、利用者どうしが写真を指差しながら会話する場面が見られた。こうした取り組みにより、利用者それぞれの記憶を掘り起こし、西和賀町の昔の暮らしを共有・価値化していけるのではないかという手ごたえを感じた。

高齢化率47%の西和賀町において、高齢者向けアウトリーチの充実は今後に向けた大きな課題である。今回の出張発表会をひとつのモデルケースとして、地域の高齢者やその周辺施設との関係作りを積極的に進めていきたい。



ヘンテコ楽器で劇をつくろうワークショップ①

「見たことのない楽器で遊んでみよう」

8月21日（火）19：00～21：00

会場：まちなか交流館

参加者：27名

ヘンテコ楽器で劇をつくろうワークショップ②

「楽器でお芝居を演じてみよう」

8月22日（水）19：00～21：00

会場：銀河ホール

参加者：22名

「ヘンテコ楽器で劇をつくろう」と題し、町内の親子向けに楽器を用いた体験型WSを実施。2日間で延べ50名ほどの参加者が集まった。21日夜の回では、「花火」「夕立」「初恋」などのテーマに沿ってチームごとに音作りを体験した後、短い物語と俳優の演技に合わせて効果音を加えるアクティビティを行った。この日は地元の小中高生やその保護者、町外からの一般参加者など幅広い年齢層が集まり、WSは活発かつ和やかな雰囲気で行った。参加者それぞれがお気に入りの楽器を見つけ、体を動かしながら表現することを楽しんでいる様子が印象的であった。

22日夜の回では、舞台上を幕で仕切って簡易な録音環境をつくり、参加者全員でラジオドラマ2作品の収録に取り組んだ。WSは役割分担から始まり、台詞の練習をするチームと効果音を作るチームに分かれてクリエイションを行った。1時間後に合流し、2作品の録音を実施。収録後、地元の小学生たちは「練習よりうまくいったよかった」「ちょっと失敗してしまっただが頑張れた」など、活動に対する充実感を語った。

録音した音源は、告知端末によって1ヶ月ほど町内全戸に放送し、事業の成果共有を行った。



●この事業への参加動機

西和賀町文化創造館銀河ホールは、今からおよそ26年前に建てられた演劇専用ホールです。戦後から現在に至るまで活動を継続してきた地域劇団「ぶどう座」の実績を背景に、開館当初から積極的に演劇事業を実施してきました。しかし、地域の人口減少等により、鑑賞事業を中心とした従来型のホール運営を続けることに限界を感じていました。また、ホールで実施している事業に対して「成果が町民に還元されていない」という意見も出されており、ホールのミッション・運営方針に見直しをかけ、地域課題と向き合っていくためにリージョナルシアター事業のプログラムを活用できないかと考えました。

●企画・実施において苦労した点

事業を実施するにあたり、アーティストと担当者間で話し合った結果、【アーティスト、町民、町外の人々の三者が互いに知り合い、名前呼び合えるような「固有名詞の関係性を築く」こと】をテーマにプログラムを組んでいく、という基本方針が定まりました。しかし、いざプログラムを練り参加者募集を開始してみると町内の反応はかんばしくなく、「結局なにをする集まりなのかわからない」という声が聞かれることも多々ありました。事業の周知共有の難しさを肌で感じつつも、メールやファックスで簡易な文書を送ったり、時には直接赴いて協力を仰いだりと説明を重ねたところ、徐々に事業に理解を示す人たちが増えていった印象でした。事業のパッケージングや呼びかけ方にもう一工夫が必要だったと感じています。

また、銀河ホールは町の南側（旧湯田町）に位置しており、町の北側（旧沢内村）に住む町民への周知共有が十分でなかったことも反省点の一つです。全町的に車以外の交通手段がほとんどなく、移動にもそれなりの時間を要するため、北側の地区に住む人にとってはホールへ来ること自体が大きなハードルであることを知り、「来てもらう」のではなく「こちらから行く」アウトリーチプログラムの重要性を改めて認識しました。

●プログラムを実施した成果

第一に、ワークショップを通してラジオドラマ5作品を完成させることができたことは、今回の事業における大きな成果でした。町についての語りに耳を傾け、それをもとに物語を創作し、人間の身体を通じて立体化していく一連のプロセスは、参加者のみならず私たち担当者にも多くの示唆を与えてくれました。それは、町の歴史とそこで生きてきたひとたちの記憶を、単なる情報としてではなく、ナラティブな物語として捉え直す体験であるように感じました。「固有名詞の関係性を築く」ということに関して言えば、担当者自身「ここに行けば△△さんに会える」「この件は○○さんに聞いてみよう」という有機的なつながりを多く得ることができましたし、参加者間でも直接お話を伺った相手の顔と名前は強く印象に残っているようでした。ここで築かれた関係性を一過性のものにせず、よりよい形で今後のホール運営に繋げていきたいと考えています。

また、今回は2ヶ所の福祉施設に直接出向いて高齢者への聞き取りや発表を行ったこともあり、銀河ホールの存在感を示すことについても一定の成果が得られたように思います。

●今後の展望

今回の事業により、親子向けWSや高齢者施設へのアウトリーチをひとつのモデルケースとして、ホールの中と外を柔軟に行き来しながら企画実施・フィードバックを展開する事業サイクルのビジョンがより明確になりました。町外の学生等に向けた演劇事業は継続しつつも、町民と協力しながらホールや地域の課題に取り組んでいく新しいかたちの事業設計を模索していきたいと思っています。

創作を通じて地域と交流

ごまのはえ

2018年夏私たちは岩手県西和賀町に派遣されました。この町にある「銀河ホール」では毎年「ギンガク」という事業が行われます。全国から大学生や大学院生を集めて銀河ホールを使って作品を作らせるレジデンス事業です。集まった学生たちは町内にある温泉旅館に泊まりつつ作品を創作します。この学生たちと西和賀町の町民との交流を盛んにすることが、今回のリージョナル事業の目的でした。

この目的を達成するため、私たちは西和賀を題材にした作品を「ギンガク」の学生たちに作ってもらう、その創作指導を私が担うという大まかな図を作りました。そして事前に、町の人達に協力してもらい西和賀の昔の写真を集めました。

一回目派遣ではその写真から着想を得て「ギンガク」学生たちに短編戯曲の執筆に挑んでもらいました。まず私と同行の脚本家田辺剛氏の二人で戯曲講座を開き、そして集まった写真から学生本人が気に入った写真を選び、その上で町内のディサービスで年配の方に聞き取りをしたり、写真提供者にインタビューをしたりして、興味を膨らませていきました。創作メンバーには西和賀の高校生もおり、彼らにとっては祖父母よりも年上の方々から話を聞く機会になりました。そのうちの一人が60年前の写真にうつった女の子を気に入り、彼女は現在どこにいるのか、盛んに聞いてまわっていたことが印象に残っています。こうして町民の方々に助けをもらいながら幾つかの短編戯曲が出来上がりました。またそれを町民有志数名で地元の方言に書き換えてもらいました。

数週間の間をあげ、二回目派遣では出来上がった戯曲をもとに、「ギンガク」の学生たちと朗読劇を創作しました。まず大変だったのは方言。町民有志がつきっきりで指導してくれました。方言がさまになってゆくにつれ、戯曲に命が吹きこまれるようでした。確かに西和賀の話が出来上がりつつある、そんな実感を持ってました。そして私が持参した民族楽器で効果音を作成し、題材にした写真をプロジェクターで背景に投射し、写真と朗読を一緒に鑑賞する「見える朗読劇」を完成させました。そしてこれを町内の老人ホームで上演しました。写真が大きく映るたびに客席のあちこちから声があがり、朗読に耳を傾ける人もいれば、お隣さんと往時を懐かしむ人もいました。

今回のリージョナルシアターのシメは、出来上がった戯曲をボイスドラマとして収録することです。地元の子供たちに民族楽器のワークショップを行い、劇中の様々な効果音を作成しました。そして最終日に劇場で録音。出来上がったボイスドラマは後日町内にくまなく放送されました。

目的である「ギンガク」学生と町民の交流を盛んにすることは達成できたと自負しています。作品作りの工程を、町民の方が関わりやすいように分かりやすく公開できたのが良かったのだと思います。写真の募集、取材先のブッキング、方言指導員の確保などなど、劇場の事業担当者がタイミングよく取りかかってくれました。

また「ギンガク」学生たちの熱意にも助けられました。高校生や大学生が自分のことを表現するのではなく、西和賀という町の表現に力を尽くしてくれました。これも易々とできることではありません。これは推量ですが、西和賀の自然に囲まれていると、風が木々を揺らす音や、山霧に陽が差し込む様子、夜の鳥たちの声に、素朴な想像力をかきたてられます。そんな環境が都会で行うのとは違う方向に皆の創作を導いたのかもしれない。

今回の派遣は関わった人すべてが、西和賀町の過去に耳をすませる体験をしました。西和賀町はいま様々な問題を抱えています。今回の体験が未来を見据える視座をつくりあげるための一助になればと願っています。

牛久市中央生涯学習センター（茨城県牛久市）実施データ

実施団体	牛久市
実施ホール	牛久市中央生涯学習センター
担当者	中島祥子、齊藤美奈子
派遣期間	下見派遣 平成30年9月2日（日）・11月27日（火） 1回目派遣 平成31年1月20日（日）～1月21日（月） 2回目派遣 平成31年1月27日（日）～1月28日（月）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介 アシスタント：佐山和泉、橋本清（1回目）村上厚二、山本晃子（2回目）
<p>■下見派遣内容</p> <p>9月2日（日）内部レクチャー、企画内容打合せ、市内巡視 11月27日（火）企画内容打合せ、百景社打合せ、神谷小学校下見</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>1月20日（日）こどもあそびひろば（小学生対象公募ワークショップ） 1月21日（月）神谷小学校ワークショップ（4年生対象） ファシリテーター養成ワークショップ（百景社）</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>1月27日（日）パパママいどばたひろば（乳幼児保護者対象公募ワークショップ） 1月28日（月）神谷小学校ワークショップ（4年生対象） ファシリテーター養成ワークショップ（百景社） フィードバック</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣		2回目派遣	
	9月2日	11月27日	1月20日	1月21日	1月27日	1月28日
9:00	移動	移動	移動	神谷小 WS (4-1) 8:40～10:15	移動	神谷小 WS (4-2) 8:40～10:15
10:00				神谷小 WS (4-2) 10:35～12:10	乳幼児保護者対象公募 WS 10:30～11:30	
11:00	レクチャー・ 打合せ	打合せ				
12:00						
13:00	市内巡視	百景社打合せ				神谷小 フィードバック
14:00	打合せ	神谷小学校下見	小学生対象公募 WS 14:00～16:00		乳幼児保護者対象公募 WS 14:00～15:00	
15:00						
16:00				ファシリテーター 養成 WS 16:00～18:00		ファシリテーター 養成 WS 16:00～18:00
17:00	移動	打合せ				フィードバック
18:00						
19:00		移動		移動		移動
20:00						
21:00						

プログラム詳細

小学生対象公募ワークショップ「こどもあそびひろば」

1月20日（日）14：00～16：00

会場：牛久市中央生涯学習センター多目的ホール

参加者：18名

これまで自主事業のターゲットとしてフォーカスをあてる機会が少なかった層のひとつとして、「こども」をターゲットにした公募型のワークショップ。打ち合わせ中に挙げた「牛久には児童館がない」という気づきから、子どもたちが自由に遊べる場をつくることになった。学校へチラシ配布を依頼したところ定員を大きく上回る申込があった。

「だるまさんがころんだ」などのゲームのあと、紙コップやダンボールなどを使っての屋内での遊び、警ドラや鬼ごっこの外遊びなどで、TJ（多田さん）の呼びかけや提案に盛り上げられながら思い思いに遊んでいた。

来場した半数が初めて中央生涯学習センターに来たという子どもたちの中からは「思っきり遊べたのが楽しかった」「いつも会わない人とふれあえた／お話しできたのがよかった」という声が寄せられたほか、参加した子どもたちの保護者の方からは「学校、学年の違う子と関わったり、おもいっきり相手をしてくれる大人と遊べるのがいい」「初対面のお友達や大人とも遊べるのは良い経験」という感想が聞けた。



神谷小学校ワークショップ（1週目）

1月21日（月）8：40～10：15（4-1）／10：35～12：10（4-2）

参加者：41名（4-1）、39名（4-2）

校長先生、担当（教務主任）の先生との話し合いの中で「せっかく実施するならば効果が見える形で実施したい」というお声をいただき、4年生の2クラスで2週連続のワークショップを実施することになった。

1週目はエア大縄とびや逆じゃんけん、だんだん小さくなる／大きくなるボールリレーなど、身体をつかったワークショップを中心に実施した。子どもたちは見えないものが見えるようになる感覚や、全員で同じものを想像し、その中で役割を演じることを全力で楽しみ、体感していた。

後半では「もうじゅうがりにいこうよ！」で「へんな〇〇（動物）」をテーマにグループで動物を表現したり、学校の場所をグループごとに表現して他の児童にあててもらうなど、アイデアを出しながらグループで作品をつくる2週目への導入となった。

この段階では、学校の先生から「ただ遊んだだけなのでは…」という不安感もあったようだったが、あくまで子どもたちとアーティストの関係づくりや2週目への導入という点での必要性を説明し、先生方のモチベーションを下げないことも意識した。



プログラム詳細

神谷小学校ワークショップ（2週目）

1月28日（月） 8：40～10：15（4-2）／10：35～12：10（4-1）

参加者：36名（4-2）／40名（4-1）

2週目は「転校生がきた」というテーマでグループごとに劇をつくるワークで、劇づくりの前に性格カードを児童に書いてもらい、他のグループの性格カードと交換してひとりひとり違う性格で演じて「誰がどの性格を演じているか」をあててもらい演劇ゲームとして実施した。

「みんながどんな性格を持っているか」の洗い出しや、劇づくりの場面ではそれぞれが意見を出し合い、グループ全体でまとまって劇づくりに取り組む様子が見られ、どのグループもストーリーを作り上げて発表をしていた。

児童向けのアンケートでは「いつものグループではない友達と話せてよかった」「自分の意見に自信がついた」「劇を通してどういうことを言われたらどういう気持ちになるかわかった」などといったコミュニケーション力や自己表現力、共感力の向上を実感する声が多く見られた。

女の子が多い学年ということ、また思春期の始まりの時期ということもあり、下見の際に聞きとった「人間関係や役割の固定化」という問題意識に対しても先生方は効果を感じられたというご意見をいただき、「子どもたちの新しい一面が見られた」「その後の学校生活でも、自分の意見を言えるようになったり表情が明るくなったりした子も多い」という感想が寄せられた。



ファシリテーター養成ワークショップ

1月21日（月） 16：00～18：00／1月28日（月） 16：00～18：00

会場：百景社アトリエ

参加者：3名（21日）／4名（28日）

小学校でのワークショップを来年度も継続して実施していくことを前提として、牛久近隣に拠点をもち活発に活動をしている劇団「百景社」の方々に事業協力をお願いした。

ファシリテーター養成ワークショップでは来年度の小学校ワークショップのプログラムをつくることを目指して実施した。

1週目では多田さんが百景社向けにアウトリーチのレクチャーを中心に実施し、これまで実施してきたプログラムを実際に体験する時間をとった。

2週目には神谷小学校のワークショップにもアシスタントとして参加していただき、その上で来年度以降どんなワークショップをするかディスカッションした。

来年度実施に向けて具体的な内容まで落とし込めただけでなく、「児童生徒にどういう体験をしてもらいたいのか」などの核になる部分でしっかり意思共有できたのは、今後につなげるための重要な時間だった。



プログラム詳細

乳幼児保護者対象公募ワークショップ「パパママいどばたひろば」

1月27日（日）10：30～11：30（1回目）／14：00～15：00（2回目）

会場：牛久市中央生涯学習センター大講座室

参加者：3組8名（1回目）／2組6名（2回目）

20日の小学生対象ワークショップと同様、普段中央生涯学習センターに足を運ぶ機会が少ない「子育て世代」にフォーカスをあて「パパママいどばたひろば」というタイトルで場をひらいた。

時間中は出産のときのエピソードやわが子自慢、悩み相談などざっくばらんに「子育て」にまつわる話を車座でし、ゆるやかな時間が流れていた。

最後には介護の場面をロールプレイングするワークで、うまく意思疎通ができない相手でもただ否定するのではなく一度受け入れて相手と自分の気持ち（欲求）を一致させることを、入れ替わりながらお互いの立場で体感した。演劇として自分から切り離して客観視することで、「対話すること／コミュニケーションをとること」への気づきを与えられたように思う。この気づきは介護や子育てだけでなく、日常の人間関係についても生かされると感じた。



●この事業への参加動機

牛久市中央生涯学習センターは市民に対して広く文化活動への参加機会を提供していくことが市の計画等にも定められており、様々なサークルや文化団体が施設を利用しています。貸し館の稼働率がいいということもあり、これまで会館の自主事業としてはごく限られた回数の買取公演がほとんどであり、牛久独自のプログラムづくりや会館でのいちからの企画にはなかなか手が届いていないのが現状です。また、貸し館利用も高齢の方々のサークルが多く、子どもや若い世代の方々と出会う機会の少なさを感じていたところでした。

これまで「自分は文化や芸術に関係がない」と思っている地域の人々にも身近に文化芸術体験をしてもらいたいと思っており、これからの牛久市中央生涯学習センターの新しい使い方、交流の場づくり、日常の中に表現活動がある風景を考えていきたいと思い、今回リージョナルシアターに申し込みました。

●企画・実施において苦労した点

学校でのワークショップは「学校での市関連の行事が多く授業数が圧迫されている」という課題に直面し実施校がなかなか決まらないという事態に陥りました。地域創造の皆さま、多田さんにアドバイスをいただきながら学校へのプレゼン内容を詰めて説明の場を重ねました。学校でのワークショップについては仲介役としての立場についても考えさせられることが多く、本来であればこちらから伝えるべきところをアーティストや地域創造の方々に伝えていただいってしまうなど、両方の立場で場をコーディネートすることの難しさを感じました。

また、内部への説明についても、概念的な説明ばかりになってしまうところを、説明相手それぞれに理解しやすいように言葉を変えながら説明していくことも難しいことでした。逆に、今回の事業を説明しやすいように自分の中で固めてしまい、最初参加者公募の企画に「ワークショップシリーズ」とタイトルをつけていたところ、打合せ時に多田さんから「本当に『ワークショップシリーズ』なのか？」という投げかけを受けてはっとした場面もありました。

●プログラムを実施した成果

上の苦労と重なる部分でもありますが、今回施設管理担当と自主事業の必要性について話す機会ができたのは今後のセンター運営においても必要なことでした（完全に問題意識を共有できたかは疑問）。学校への説明についても、これまでは既存のプログラムについて同意を得るのみだったのを、今回はしっかり学校の課題や疑問の声を受けとめながらプログラムの準備に取り組めたのは、今後事業の見直しや立ち上げをしていく上で貴重な経験をさせていただきました。

また周辺地域で活躍している劇団である百景社の方々と出会い、一緒にプログラムづくりに取り組めたのも大きい成果でした。

●今後の展望

小学校へのワークショップは来年度も継続して実施していくことになり、その先も継続して実施できるように学校へのアプローチを続けていくとともに、劇団との連携を強め、二人三脚でプログラムをつくっていききたいと思います。

また今回参加者を公募するプログラム（小学生対象／乳幼児の保護者対象）では「センターを様々な層にひらいていくための継続できるスキーム」として「〇〇ひろばシリーズ」としました。今後、様々な「ひろば」をひらき、これまでセンターに来なかった人たちにまず来てもらう、そしてその可視化したひとりひとりとどんなことができるかを考えた先に、これまではっきりしなかった「牛久らしい」風景が見えてくるのではないかと思います。

場をつくる

多田 淳之介

牛久市では、生涯学習センターでの“ひろばシリーズ”の立ち上げ、小学校アウトリーチ、ファシリテーター育成のプログラムを実施しました。“ひろばシリーズ”は、生涯学習センターの利用者層に限られていることへの問題意識から、スペシャリストによるワークショップではなく様々な層へ開いていく継続可能な場づくりのプログラムとして立ち上げました。

今回は1回目はこども、2回目は育児中の方という対象を設定し、こども対象の“こどもあそびひろば”は、こどもや保護者からの満足度も高く、保護者の方からのお話で実は地域に児童館が無いということもわかり、継続性も含め地域のニーズとうまくマッチしたひろばになりました。2回目の“パパママいどばたひろば”は当日になって来られなくなった家族も多く参加者の数に課題が残りましたが、今後の継続を考えると参加者3名以上いれば成立するくらいのゆるい感じで良いのではないかと思います。そのうちどんなひろばを開いてほしいか市民からのリクエストに応えたり、地元グルメ情報ひろばとか、物々交換広場とか、市民同士で情報や物が行き交う＝新たなコミュニケーションが生まれるものも面白いと思います。

小学校アウトリーチは、牛久市としても初めての取り組みで御多分に洩れずアウトリーチ先の学校探しに苦労しましたが、唯一開催を希望してくれた神谷小学校からは、実施するなら単発ではなく連続したプログラムで来年度も継続して実施してほしいという希望があり、ファシリテーター育成プログラムも来年度の神谷小学校でのプログラム実施を目指したプログラムになりました。ファシリテーター育成は現場がないとなかなか育たないもので、リージョナルシアター事業の場合は実際のアウトリーチ実施と絡めて計画することができる稀な現場なので今後もこういった機会が作れればと思います。

アウトリーチ実施後の先生からのフィードバック、アンケートでも今回の成果を非常に感じてくれたようで来年度に向けて学校としても改めて高い意識を持ってくれました。この活動がモデルケースとなり他の小学校にも派生していくことを期待しています。基本的にワークショップは即効性を期待するものではありませんが、その日の午後の授業から今まで手を挙げなかった子が手を挙げてくれた、意見を言わない子が意見を言うようになったなど目に見える変化もあり、背中を少し押してあげるだけで見えてくるこども達の可能性を改めて感じました。先生からは自分が担任するクラスの子を初めて客観的に見る機会になり生徒への視点が変わったという貴重な感想もありました。生徒だけではなく先生にとっても有意義だということは、学校アウトリーチの成果としてもっとアピールして良いでしょう。

ファシリテーター育成プログラムは、神谷小でのアウトリーチの見学とアシスタント参加、そのフィードバックをしながら、自治体とアーティストがお互いになぜこの事業をやるのかのコンセンサスを取ることを第一の目的に実施しました。百景社のメンバーも非常に意欲的で今回牛久市と並走できる関係が作れたことは今後の展開にかなり期待ができます。

学校アウトリーチは、コミュニケーション能力育成への効果も世界的には常識であり、アクティブラーニングも推奨されているにも関わらず、いまだに先生達が多忙であることや行事、授業進行の妨げになることを理由に敬遠されがちです。授業の時間を潰すのが難しければ、いっその事アーティストと一緒に授業内容を考えることはできないでしょうか。新たな場がつかれないのならば既存の場を変えていくことに可能性があるかもしれません。

公益財団法人東松山文化まちづくり公社（埼玉県東松山市）実施データ

実施団体	公益財団法人 東松山文化まちづくり公社
担当者	鈴木和幸・中山智恵
派遣期間	下見派遣 平成30年6月18日（月）～6月19日（火） 1回目派遣 平成30年9月21日（金）～9月26日（水） 2回目派遣 平成31年1月30日（水）～2月2日（土）
アーティスト等	アーティスト：有門正太郎 アシスタント：門司智美、木下海聖（1回目） 門司智美、加賀田浩二（2回目）
<p>■下見派遣内容</p> <p>6月18日（月） 打合せ、インリーチ・一般公募ワークショップのプログラムの作成、まちあるきの POINT 探し 6月19日（火） 市内案内、まちあるきの POINT 探し 打合せ、インリーチ・一般公募ワークショップのプログラムの作成</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>9月21日（金） 松山第一小学校の下見・事前説明 9月22日（土） 市職員等へのインリーチ 演劇に興味がある方へのワークショップ 9月23日（日） 一般公募ワークショップ 2回目派遣打合せ 9月24日（月） 2回目派遣打合せ 9月26日（水） 桜山小学校の下見・事前説明 ※別枠として</p> <p>■2回目派遣</p> <p>1月30日（水） 打合せ 1月31日（木） 桜山小学校アウトリーチ①② 2月1日（金） 松山第一小学校アウトリーチ①② 比企地区高校演劇部へのワークショップ 2月2日（土） フィードバック</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣				
	月日	6月18日	6月19日	9月21日	9月22日	9月23日	9月24日	1月30日	1月31日	2月1日	2月2日
9:00	移動	まちあるき POINT 探し	移動	インリーチ 10:30~12:30	一般公募 WS 10:00~13:00	2回目 派遣内容 打合せ	移動	移動	移動	移動	移動
10:00											
11:00											
12:00	打合せ	打合せ	松山第一小 下見	演劇関係 WS 14:00~15:30	2回目派遣 小学校 打合せ	打合せ	打合せ	打合せ	打合せ	移動	移動
13:00											
14:00	まちあるき POINT 探し	移動	インリーチ 演劇関係 WS 打合せ	一般公募 WS 打合せ・準備	打合せ	打合せ	打合せ	打合せ	打合せ	高校演劇部 WS 16:30~18:00	移動
15:00											
16:00	打合せ	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動
17:00											
18:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動
19:00											
20:00	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動	移動
21:00											

プログラム詳細

市職員等のインリーチ「創造する体験！」

9月22日（土）10：30～12：30

会場：総合会館 会議室

参加：11名

対象：東松山市職員、東松山市教育委員会職員、東松山市内小学校教諭、当財団職員

内容：小学校で行うアウトリーチプログラムを、教育現場や、役所の職員が体験するインリーチプログラム。今回、東松山市で初めて開催する演劇アウトリーチということで、実際にどんなことをやるのか、どんな効果があるのかを、有門さんに、子どもたちが体験する2時限分（90分）のプログラムを、その効果や目的の解説を聞きながら、体験してもらった。

参加者からは、教育現場で是非やってもらいたい、自分の学校でも開催出来ないかななどの声を頂いた。



演劇に興味がある方へのワークショップ「表現する体験！」

9月22日（土）14：00～15：30

会場：総合会館 会議室

参加者：15名

対象：一般公募（演劇経験者からの応募を想定していたが、経験のない方の参加もあった。）

内容：演劇の面白さを知ってもらい、演劇を身近に感じていただきたく開催。参加者同士で行うプログラムが中心で、タッチされそうになったら他の参加者の名前を呼ぶとその人が鬼なるというルールで鬼ごっこ、ペアになって一人がもう一人の後ろに付いて肩を叩いて進む・右に行く・左に行くという合図を出す「車」というプログラム等を行った。

小学生の参加もあり、幅広い年齢層でワークショップを行うことができた。戸惑っている子どもたちを大人がフォローする等、参加同士の交流が深まるのを感じることができた。

また、市内には、演じることに興味をもたれている方が多くいる事がわかった。これを機会に繋がりを深めていきたい。



プログラム詳細

一般公募ワークショップ「ありかどんと探検！」

9月23日（日）10：00～13：00

会場：総合会館 会議室及び会館内

参加者：13名

対象：小学生以上

内容：東松山市役所の隣にある総合会館。普段は、あまり市民に知られていない施設だが、有門さんのまちあるきワークショップで、建物内の様々な場所を探検して、気になるところを写真撮影し、そこから物語をつくるというプログラムを行った。会議室内で自己紹介等を行い、そのあと2つのグループに分かれ、総合会館を探検。会館の中や会館の外から写真を撮った。撮った写真に絵を描き加えて、グループで一つの「物語」を作った。子どもたちの発想力がどんどん広がっていく様子を見て、一緒に参加した保護者は感心していた。最後は、グループごとに作った物語を発表。子供たちは自分の言葉で一つ一つの想いを一生懸命伝え、保護者もその姿に感動していた。



桜山小学校アウトリーチ

1月31日（木）10：20～12：00（5年1組）／13：15～14：55（5年2組）

参加者：24名（5年1組）／24名（5年2組）

市の南側に位置する高坂ニュータウン。高齢化が進むニュータウンで生徒数は少ないが、生き生きと活発な子供たちが多い小学校である。

初めて見る普段接することのない大人（俳優）が演じる「ういろう売り」に、興奮気味の子どもたちだったが、だんだんと引き込まれ集中していった。色・形さがし、だまし絵、と進むにつれ、子ども達の様々な発想に、周りの大人が驚くほどであった。

最後に、有門さんが事前に撮影していた教室内の写真に思いのタイトルや絵を書き足していった。

普段見える何気ないものの中にも、発想する力、表現する力で、楽しみながら生活が送れるのだと気づくことが出来た。



松山第一小学校アウトリーチ

2月1日（金）10：45～12：25（4年1組）／13：45～15：25（4年2組）

参加者：31名（4年1組）／30名（4年2組）

市役所と隣接するこの小学校は、市の行事など様々な体験をする機会も多く、落ち着いた子供たちが多い。

前日の小学校と同じように、「ういろう売り」「色・形さがし」「だまし絵」「学校の中の写真から創造」と、有門さんのプログラムに積極的に取り組んでいた。

子供たちは、様々な想像力で、めにみえないものを生み出していった。また、時間を追うごとに、それを言葉として表現していくことも楽しんでいった。

ただ、急遽、視察の大人が20名近くになってしまい、子どもたちが緊張している様子もうかがえ、誰のためのアウトリーチなのかという事を考えさせられた。



高校演劇部へのワークショップ『「創造」と「コミュニケーション」から生まれる新たな可能性』

2月1日（金）16：30～18：00

会場：総合会館 多目的室

参加者：23名

対象：比企地区高校演劇部

内容：比企地域には現在演劇部がある高校は4校。春と秋に演劇祭を行っている。事前のアンケートでは、演技に関する知識や、舞台技術の知識について知りたいという意見が多かったが、学校間での交流がない事を重視し、コミュニケーションをテーマにプログラムを行った。

プログラムは小学校アウトリーチと同じ内容だが、高校生ならではの発想があり、最後はその写真を使った発表まで行う事が出来た。

有門さんから「演じるという事は、ただ演技の知識を得るだけではなく、自分の心も成長させることが大切だ」との、お話を受け、生徒だけでなく、視察されていた顧問の先生方も、真剣にメモを取っている姿が印象的だった。



●この事業への参加動機

埼玉県比企地域の中心都市である東松山市では、近年芸術に関する意識が高まっている。

音楽の分野では、市民参加の第九演奏会を開催し、芸術の分野では多くの市民が芸術活動に参加、市民の文化芸術をアーカイブするひがしまつやま芸術祭を2013年から実施しており、本年で6年目を迎えた。市、財団を挙げて「音楽と芸術の町」として様々な文化事業に力を注いでいるが、“人と人のつながり”に深く特化した芸術である、演劇、ミュージカル、オペラなどの総合舞台芸術の分野では後れを取っている感は否めない。市民が舞台を鑑賞する機会を増やし、またその後続く市民参加劇への機運を高めていく為にも、演劇によるワークショップを行う事で、東松山市を中心とした、比企地域に舞台芸術文化を広く根付かせ、市民が自ら演じる事、コミュニケーションを取ることの重要性を知り、市民参加作品への第一歩となればと考えている。

●企画・実施において苦労した点

◆企画時

応募当初、この事業の対象者について演劇人の発掘・鑑賞人口の増加にばかり目を捕らわれていた。

同じ参加団体の方々の意見や、アーティストの皆様の事業紹介や打ち合わせで、「だれに・なんのために」この事業を行うのが重要であると気づき、対象者・方向性などの変更を行うこととなった。

対象者を幅広く設定したことで、各方面との調整等が難しくなることもあった。

◆実施時

一般の方を対象とした事業では、「演劇」はまだまだ市民の方々にはなじみのあるものではなく、集客にはかなり苦労した。

また、チラシなど広報物では、イベント内容を把握できなかったという意見もあり、「だれに・なんのために」は、ここでも重要であると認識した。

●プログラムを実施した成果

各プログラムの参加者からは、「楽しかった」「新たな出会いがあった」「続けていってほしい」「有門さんたちと出会えてよかった」と、多くの有難い声をいただいた。

財団職員としても、新たな事業に挑戦し、一丸となって取り組めたことで、職員の成長、また本事業が与える市民への影響を実感できたことは、大変有意義であった。改めて、アーティスト、地域創造の皆様へ感謝を述べたい。

また、事業を進めていくうえで、人とのつながり、対話の重要性、そして想像力が、子どもたちだけではなく、私たち大人にも大変重要であることを改めて認識することとなった。

●今後の展望

対象者を幅広く設定して行った今回の事業だが、やはり「だれに・なんのために」が最重要であると考えている。

当財団は、来年度から市のホールを運営することとなる。改めて、文化事業が地域にとって今求められている事、その先にあるものを、しっかりととらえ、発信し、またそれによる効果や外部に対する説明を的確に行えるよう、事業計画を長期的に、かつ継続的に立てていきたいと考える。

焦らず地に足をつけて歩む

有門 正太郎

東松山市は埼玉県ほぼ中央にあり、多くの街道が集まる交通の要衝として、比企地域の中心都市である。人口は9万人、微増ではあるが郊外ではニュータウンの過疎化が問題でもあった。

東松山文化まちづくり公社は演劇にも力を入れており「東松山戯曲賞」をはじめ公演以外にもいろんな演劇プログラムで町と関わりたい、関わっていかねばという使命感も担当者から受け取れた。またホールを持ってない公社が今後どのように市民と関わって行けるのかを模索している様にも見受けられた。

リージョナルシアター事業では「どのような事がやりたいのか」、「それを得て今後どのように考えているのか」を確認しながらプログラムを考えていく。

下見派遣では公社が管理している公園を使うプログラムや国際ウォーキング大会【日本スリーデーマーチ】開催地でもある街あるきのプログラム、地元の大学と連携、アウトリーチ、演劇ワークショップ、などあらゆる可能性を模索する時間にあてられた。

ホールを有してないからこそ出来る事はないか?という観点からもプログラムを考えた。

プログラムを考えていく上で「おんかつ」経験からなのか担当者が「おんかつ」との違いに戸惑いを感じている事も見受けられた。

結果的に東松山市の現状や公社の現状など色々な側面が見えてきた事は大変有意義だった。

視点を変えると宝になる

公社の入っている総合会館は市役所に併設し、市民からも市役所の一部としての認識が高いようだった。白江龍三デザイン(金沢駅東広場も手掛けた)の建物に魅力と可能性を多く感じワークの開催場所を総合会館に決めた。普段馴染の少ない子どもたちを招き入れ総合会館の物語をつくるプログラムを行うことになった。他にも教職員向けインリーチ、俳優ワークショップを行った。印象深いのはインリーチに市の職員や教師、教育委員会、公社の職員含め教育現場に密接に関わってる方が多く参加され活発な意見交換が行えたのは有意義だった。

2回目派遣では小学校アウトリーチと高校演劇部向けワークショップを行った。

インリーチで体験した市の職員も複数見学に来られ担当者のこの事業にかける意気込みが伝わってきた。

高校演劇部向けは時間の制約の中、オリジナルのストーリーを創作する事が出来たが、何よりも意味のあったのはその後の生徒交流会だった。ワークショップを経て仲良くなった者同士から段々と学校を超えて交流していく様子がこの時間こそ大切だと感じた。

種をまき、適度な水やりの関係性

今回はじめて演劇アウトリーチに取り組むにあたり、インリーチをしっかりと行えたのは意味のあることだった。教育委員会ははじめ市の職員や校長先生に体験してもらい、そして実践を客観的に見てもらう事でアウトリーチの意味を深く理解していただけたように感じている。

しかし課題も多く見えてきた。

今後どう方向性を見出して進むのか、高校生とも繋がりたい、アウトリーチもやりたい、ファシリテーター養成もやりたいなど可能性が見えてきたからこそ無理せず継続する方向をどう導きだすかだと思ふ。

また今回行った秩父でも同じことが言えるが、担当者がコーディネーターとしての役割を理解し、しっかりとアーティストと学校側とのパイプ役を担っていく必要性も感じた。

「楽しかった、またやりたい」「来年も開催してください」

参加者の言葉を聞きながら、少ない職員で疲弊せずどのくらいのペースで進めていくのかしっかりと話し合ってもらいたい。

来年度は事業も多くあると聞いた、音楽関連はもちろん「東松山戯曲賞」の創造作品も控えている。「やりたい」と「やらされてる」ではモチベーションは全く違う。

ハイペースで飛ばしすぎると息切れしてしまう。働いてる職員も市民の一人だ、この町をもっと素敵な街に、そして働きやすく芸術が根付く街になって欲しいと感じた。

最後に「埼玉は何もないんです」と多くの方が言ってきた。

多くの方が思ってるなら、それこそチャンス到来だ。

視点を変えて「何もない」を「宝物」に変えて欲しい。

秩父宮記念市民会館（埼玉県秩父市）実施データ

実施団体	秩父市
実施ホール	秩父宮記念市民会館
担当者	島田千華子、高井真明
派遣期間	下見派遣 平成30年7月10日（火）～7月11日（水） 1回目派遣 平成30年9月27日（木）～9月30日（日） 2回目派遣 平成31年1月23日（水）～1月26日（土）
アーティスト等	アーティスト：有門正太郎 アシスタント：門司智美、木下海聖（1回目） 門司智美、加賀田浩二（2回目）
<p>■下見派遣内容</p> <p>7月10日（火）企画内容打合せ・下見（尾田蒔小学校）、市内視察</p> <p>7月11日（水）企画内容打合せ・下見（南小学校・皆野高校）</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>9月27日（木）打合せ</p> <p>9月28日（金）尾田蒔小学校アウトリーチ 教員・職員インリーチ</p> <p>9月29日（土）ホールサポーターワークショップ 一般公募ワークショップ フィードバック（2回目派遣）</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>1月23日（水）打合せ</p> <p>1月24日（木）皆野高校アウトリーチ 教員インリーチ</p> <p>1月25日（金）南小学校ワークショップ フィードバック（全体）</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣			
	7月10日	7月11日	9月27日	9月28日	9月29日	9月30日	1月23日	1月24日	1月25日	1月26日
9:00										
10:00	打合せ ホール下見	南小学校 打合せ	打合せ1		ホールサポーター ワークショップ 10:00～12:00	移動				移動
11:00										
12:00										
13:00	尾田蒔小学校 打合せ	皆野高校 打合せ	打合せ2	尾田蒔小学校 アウトリーチ 13:30～15:00	一般公募 ワークショップ 13:30～17:00			皆野高校 アウトリーチ 13:30～15:30	南小学校 ワークショップ 13:45～15:25	
14:00										
15:00	市内視察	移動					打合せ			
16:00										
17:00					2回目派遣 フィードバック				全体 フィードバック	
18:00								教員 インリーチ 18:00～20:00		
19:00				教員・職員 インリーチ 18:30～20:30						
20:00										
21:00										

プログラム詳細

尾田蒔小学校アウトリーチ

9月28日（金）13：30～15：00

参加者：5年生37名

チャイムが鳴ると、児童たちは少し緊張した様子ながらも、「今日は何をやるのだろうか」とアーティストに興味津々に見つめていた。初めに有門さんが自己紹介し、「ういろう売り」の口上を披露。周りを車座になって囲み、長い台詞を途切れることなく演じる姿に夢中になっていた。その後は、色探しや形探しなどで体を動かしながらウォーミングアップをし、だまし絵や写真を使ったワークで段々と想像を膨らませていった。そして、一人1枚ずつ写真を配り、思い思いに絵を描いた。最後は全員の作品を発表し、それぞれがどのように見えたのか、どう思ったのかを共有した。同じ写真でも一人一人見えたものが違って、児童たちの発想力の豊かさに驚かされた。



教員・職員インリーチ

「解説付き教職員向けワークショップ “見えないものを見る力を養う演劇的アプローチ”」

9月28日（金）18：30～20：30

会場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスト

参加者：10名（市立中学校教員1名、市職員7名、会館スタッフ2名）

秩父地域の小中学校教員と市職員に募集を募り、ホール舞台上でインリーチを実施した。最初にニックネームを呼び合うワークで参加者同士の距離を縮めた後、有門さんが普段学校等で行っている写真を使ったプログラムを体験した。途中、子どもたちに対して気を付けていることやワークの進め方など、解説をしながら行った。最後は、参加者全員で体験した感想を共有した。教員の参加は1名だったが、中学校の現状等を知ることができ、今後の参考になった。



ホールサポーターワークショップ

9月29日（土）10：00～12：00

会場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスト

参加者：ホールサポーター5名

会館では、高校生から60代までの16名の方がホールサポーターとして活動している。今回は、ホールサポーター5名に向け、午後に行う一般公募ワークショップのリハーサルを兼ねてプログラムを実施した。ホール舞台上で色や形、「自分が落ち着く場所」などを探すウォーミングアップを行い、だまし絵や写真を用いながら想像を膨らませた。その後、ホール内を巡り、それぞれ気になる場所の写真を撮り、その写真をプリントアウトして絵を描いた。なかなか思い浮かばず少し難しそうにしている方もいたが、普段活動しているホールの新しい発見もあり、楽しそうに取り組んでいた。



プログラム詳細

一般公募ワークショップ「市民会館体験ツアー～市民会館で遊ぼう！～」

9月29日（土）13：30～17：00

会場：秩父宮記念市民会館、秩父市役所、歴史文化伝承館

参加者：小学校3～6年生12名

小学3～6年生を対象に、会館と併設している市役所庁舎、歴史文化伝承館の3施設を巡る体験ツアーを実施した。初めに参加者同士の交流を深めるために色探しや形探しなどの遊びを交えて緊張をほぐした後、だまし絵や写真を用いながら段々と想像を膨らませていった。その後、2グループに分かれて施設を巡り、子どもたちが気になった場所を写真に収めていった。プリントアウトした写真にそれぞれ絵を描いた後、その作品の「読み札」を考え、かるたを作った。自分の作った札が読まれると嬉しそうにしながら、かるた遊びを楽しんでいた。今回のワークショップを継続的に実施し、会館から周辺地域へと発展させていきたい。



皆野高校アウトリーチ

1月24日（木）13：30～15：30

参加者：1年生26名

皆野高校は地域唯一の商業高校であり、下見の際に先生から「生徒のコミュニケーション能力を高めたい」との意見があった。今回はその意見を踏まえながらアウトリーチを実施した。最初は後ろのほうで様子を伺う生徒もいたが、「イス取り鬼ごっこ」でクラス全体を巻き込んでいった。その後の写真を使ったワークでは、なかなか発想が浮かばず難しそうにしていた生徒も、一人1枚ずつ写真が配られると床に寝そべりながら思い思いに絵を描いていた。最後は作品を発表し全員で共有した。実施後に届いた生徒の感想文からは、難しく思いながらも楽しく取り組んでいたことがわかり、アウトリーチの効果が感じられた。



教員インリーチ

「解説付きワークショップ“想像力をはたらかせ、見えないものを見つける力”

1月24日（木）18：00～20：00

会場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスト

参加者：6名（県立高校教員4名、市職員1名、会館スタッフ1名）

秩父地域の高校教員と市職員を対象にインリーチを実施した。初めに、ホール舞台上で輪になりお互いの自己紹介を行った。ウォーミングアップで実施したイス取り鬼ごっこでは、「どのようにしたら鬼を座らせないようにできるか」の議論が白熱し、約20分間試行錯誤を繰り返した。その後は写真を使ったプログラムを体験し、意見を共有した。9月に実施したインリーチでは小中学校を中心に募集をしたが、今回は高校まで参加を呼びかけたことにより、教員4名の参加があったことは嬉しい驚きだった。インリーチを通じて高校との繋がりが得られたことは大きな成果だった。



南小学校ワークショップ

1月25日（金）13：45～15：25

会場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスタ、けやきフォーラム

参加者：5年生34名

南小学校は会館から一番近い学校である。今回は5年生に学校から会館まで歩いてきてもらい、ホールにてワークショップを実施した。児童たちは客席に入るときから少し落ち着かない様子。有門さんが自己紹介をして緞帳の説明をした後、舞台上上がり「ういろう売り」の口上を披露した。色探しや形探しでは、普段見慣れない舞台道具に興味を惹かれながら舞台上を嬉しそうに走り回っていた。会場を移動し、だまし絵や写真を使ったワークで想像を膨らませた後、一人1枚ずつ写真を配り絵を描いた。最後に、写真は会館で撮影したものだと種明かしし、その場所を探しに行った。見つけると興奮した様子で、楽しそうに友達同士で教えあっていた。



●この事業への参加動機

秩父宮記念市民会館は、市民をはじめ多くの方々に愛され、親しまれる施設を目指し、設計段階から市民参画のもと検討を進め、平成29年3月に開館した市直営の会館である。現在、市民とともに検討した会館のコンセプト「つながる・はぐくむ・とどける」をもとに、鑑賞事業をはじめ、普及育成事業など多彩な事業展開を目指している。

初年度は、開館記念公演として様々なジャンルの公演を企画・実施し、事業を展開してきた。その中で、演劇公演への来場者数が他の公演と比べて極端に少なく、演劇に対し敷居が高いというイメージがある一方、料金を支払って鑑賞するという習慣が地域住民にあまり根付いていないことが課題として見えてきた。

そこで、本事業を活用し、演劇や劇場に興味を持つ子どもたちを増やすとともに、会館を身近に感じてもらえるような仕掛けづくりを行いたいと思った。

●企画・実施において苦労した点

プログラムの内容より先に日程が決まったため、教員向けインリーチの実施日が学校行事と重なってしまい、参加者があまり見込めなかった。事前に予定を確認し、プログラムを組む必要があったと痛感した。

下見から派遣までの期間が長かったため、アウトリーチ実施先の学校のクラスの人数や様子に変化が起こり、その確認が実施日の直前となってしまった。下見から実施日までの間に、実施先との連絡調整を綿密に行う必要があった。

アウトリーチの様子を取材に来た記者への対応ができず、プログラムの妨げになってしまう恐れもあった。今回はアーティストの方に上手く対応していただいたため事なきを得たが、今後は充分注意していきたい。

●プログラムを実施した成果

アウトリーチ実施先の学校や、インリーチに参加された方との"つながり"ができたことが一番の成果だと思う。有門さんから「味方（理解者）を増やしていくことが大切」という言葉をいただいたが、今回の事業を通じ、会館の取り組みや展望を多くの方に伝えることができた。インリーチ参加者の中には県立高校の校長先生もいて、大変心強い味方ができたと思う。継続的に取り組んでいくことによって、味方を増やしていきたい。

また、プログラム実施後にしっかりとフィードバックをすることで、担任の先生から率直な感想や貴重な意見をいただき、教育現場の現状や抱えている問題等も知ることができた。今後の取り組みにおいても大変参考になった。

高校の先生から伺った現状として、SNSが普及し簡単に他者とつながることができる一方で、コミュニケーションが苦手な生徒が多いという。対面せずにコミュニケーションが取れる今だからこそ相手の気持ちを考えて理解する力が必要であり、そのためにも、今回のような個人の想像力を育み個性を尊重するプログラムの必要性を強く感じた。

●今後の展望

今後は「学校に出向くアウトリーチ」、「劇場を会場にした学校単位でのワークショップ」、「一般に広く募集するワークショップ」等、多角的に事業を展開していくことで、学校で抱えている問題を解決する一端を担ったり、活動の更なる周知を図っていきたい。その中で、会館を拠点として様々な人々との交流が生まれ、新しい芸術や文化を創造し発信していき、地域の劇場としての役割を果たしていきたい。

町の市民会館から私の市民会館へ

有門 正太郎

埼玉県西部に位置し、秩父山地に囲まれた秩父盆地の中央部に、平成29年3月竣工した秩父宮記念市民会館があります。この町で驚いたのは有名な秩父夜祭を始め、小さいものも含めると年間400近いお祭りが行われているそうです。

研修会、下見派遣を通し秩父の観光資源、歴史文化などに触れながら、どう市民会館を身近にそして必要な場所に変えられるだろうと話しながら街を歩きました。

地元住人はその場所に慣れているせいか町の魅力や可能性を見過ぎがちです。

私自身、住んでいる町の魅力を客人から学びます、住めばそれがあたりまえになるんですね。

そんな話をしながら、まずは「市民会館に足を運んでもらいたい」、「市民会館と住民の距離をもっと縮めたい」という流れになりました。

結果的に公演以外で演劇とのかかわり方を知るべく、インリーチを中心にプログラムが決まりました。自分たちが知ることから始めようというスタンスは素直に「知りたい」「学びたい」という気持ちが見えて嬉しくも感じました。

せっくなので市民とつながるプログラムを作ろうと話し合い出来た企画が、「市民会館であそぼう」です。ホール担当者が小学校の頃、郷土かるた「秩父かるた」で遊んだことを思い出し、そこに演劇的な要素を取り込んで「市民会館かるた」にしてしまうというもの。

当日は小学生の発想力と、撮った写真を急いでプリントする大人、写真にユニークな発想で絵を描く子どもたち、それを急いで再度かるたサイズにプリントするホールスタッフ。

子どもの想像力と大人の技術力がどんどん作品を産み出していく。大人も子どもも本気になって取り組んでいる姿、しかもみんな生き生きしている素敵な時間でした。

出来上がった「市民会館かるた」で遊んでいる様子を嬉しそうに見ているホールスタッフがとても印象的でした。

2回目派遣で小学校アウトリーチと商業高校アウトリーチも行きましたが、インリーチを丁寧に行った成果なのか体験して思う事、客観的に感じる事、学年が違う反応などが新鮮に感じてもらえたようでした。

ホール職員は決して多くないがみんな協力しながら楽しく仕事してるように見え、館長はじめ「思いついたらやってみる」の精神がこれからますます個性的な場所になる可能性を感じました。

次の一步

演劇的アプローチの可能性を提示したリージョナルを終えて様々な課題も出てきました。若者の流出や芸術とふれあう機会の少なさを今後どう市民会館が担っていくのか。アウトリーチの充実やファシリテーターの育成、地元の歴史文化との交流など様々な意見がフィードバックでは話されました。印象深かったのはコーディネーターとしての立ち位置が知りたいという意見。アーティストと参加者をつなぐコーディネーターは経験値もあるがある程度の知識がないと難しいものです。あの時はどうすれば良かったんでしょう？と素直な質問が交わされ今後の課題の一つだと感じたようです。

今後ホール側が芸術をどうやって市民と結びつけるのか、大きなミッション「つながる」「はぐくむ」「とどける」のもと「思いついたらやってみる」の精神でホールスタッフも成長してもらいたいと思いました。

余談ですが、秩父宮記念市民会館の館内を巡る Google ストリートビューなるものが HP にあるんです。ホールの舞台上まで行ける試みは大変面白く、他のホールも参考になるのではと思いお知らせしてみました。

これも「思いついたらやってみる」の賜物なのでしょう。

魚沼市小出郷文化会館（新潟県魚沼市）実施データ

実施団体	特定非営利活動法人 魚沼交流ネットワーク
実施ホール	魚沼市小出郷文化会館
担当者	姉崎裕子
派遣期間	下見派遣 平成30年4月26日（木）～4月27日（金） 1回目派遣 平成30年7月11日（水）～7月13日（金） 2回目派遣 平成30年9月26日（水）～9月29日（土）
アーティスト等	アーティスト：田上豊 アシスタント：福田健二、村井まどか（1回目） 田中美希恵、北村美岬（2回目） アドバイザー：内藤裕敬（2回目視察）
<p>■下見派遣内容</p> <p>4月26日（金）会場下見・打合せ（魚沼市小出郷文化会館・広神東小学校） 4月27日（土）会場下見・打合せ（堀之内小学校・小出小学校）</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>7月11日（水）1回目派遣打合せ 7月12日（木）堀之内小学校5年松組アウトリーチ 広神東小学校5年アウトリーチ 7月13日（金）堀之内小学校5年竹組アウトリーチ 1回目派遣まとめ・2回目派遣WS内容打合せ</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>9月26日（水）2回目派遣打合せ・一般WS会場確認 9月27日（木）小出小学校5年1組・2組アウトリーチ 教職員WS（小出地区教職員） 9月28日（金）一般WS①、一般WS② フィードバック 9月29日（土）移動</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣			2回目派遣			
	4月26日	4月27日	7月11日	7月12日	7月13日	9月26日	9月27日	9月28日	9月29日
9:00									
10:00				堀之内小学校 アウトリーチ 10:30～12:05	堀之内小学校 アウトリーチ 10:30～12:05		小出小学校 アウトリーチ 10:40～12:15		移動
11:00									
12:00									
13:00	移動	堀之内小学校 下見	移動	広神東小学校 アウトリーチ 14:00～15:40	まとめ・ 2回目打合	移動	小出小学校 アウトリーチ 14:15～15:40	一般WS① 14:00～16:00	
14:00									
15:00	打合せ				移動				
16:00			下見・打合せ 16:00～17:00			下見・打合せ			
17:00		小出小学校 教職員WS打合せ					教職員WS 16:30～19:00		
18:00	広神小学校 下見	小出小学校 下見							
19:00		打合せ						一般WS② 19:00～21:00	
20:00		移動							
21:00								フィードバック	

プログラム詳細

学校訪問プログラム 演劇ワークショップ

7月12日（木） 10：30～12：05	堀之内小学校 5年松組	参加者：29名
14：00～15：40	広神東小学校 5年	参加者：27名
7月13日（金） 10：30～12：05	堀之内小学校 5年竹組	参加者：29名
9月27日（木） 10：40～12：15	小出小学校 5年1組	参加者：28名
14：15～15：40	小出小学校 5年2組	参加者：30名

演劇的手法を使ったワークショップを実施（いすとり鬼ゲーム、3人1チームでの台本空白セリフ作り～他の班台本を使ってのグループ毎のげき発表）。

講師田上さんから、グループ毎に演劇人の観点からの良い感想や発見を聞くことによって、児童も担任も普段は見せない新たな魅力を認識することができたことは満足度へとつながったと思われる。

<参加者感想より>

児童からは、「演劇は人と人との関わりで、仲良くなる場所でもある」「いろいろなことを学べた」「演劇に興味を持った」「一番最初からシナリオをつくってみたい」、「クラスのみんなでやってみたい」「1人1人のよかったところをいってくれたので、楽しかったです。」など、ワークショップによって「伝えあう」「助けあう」「演じ合う」の楽しさを多くの児童が感じた。

また担任からは、「子どもたちが生き生きと活動していました。協力しながら、声をかけながら、演じている姿は今まで、見られなかった面を見せてもらったように感じました」また、「いつもとはちがう自分」を出すことができた子どももいて、よい経験になったと思います」「ぜひ、また同様のワークショップがあれば、きっと子供たちにとって、良い経験になると思います」など、演劇ワークショップへの継続期待度が高く感じられた。



プログラム詳細

教職員向けワークショップ「表現の可能性を見つけるワークショップ」

9月27日（木）16：30～19：00 会場：小出小学校図工室

参加者：20名（小出地区教職員）

アドバイザー内藤裕敬氏による「みえるワークショップ、みえないワークショップ」の事前レクチャーの後に田上氏による演劇的手法を使ったワークショップを実施（いすとり鬼ゲーム、3人1チームでの台本空白セリフ作り～他の班台本を使つてのげき発表）。

<参加者感想より>

『伝え合い』『助け合い』『演じ合い』の柱にそったワーク、とても楽しかったです。体育的な動きに視点を置いたものではなく、伝える、助けるに重点を置いたものなので、とても新鮮でした。少し軽い気持ちで、役という仮面をかぶれる演じるワークも、新しい自分に出会える体験だろうなと可能性を感じました。とても楽しい、すばらしい時間になりました」

「こういったものを子どもに対して行うとき、一回のみのものにせず、継続的におこなっていくためには、どのようにすれば良いか教えていただければ幸いです」



一般向けワークショップ「新たな魅力発見 えんげきワークショップ」

9月28日（金）14：00～16：00 会場：魚沼市小出郷文化会館大ホールステージ

参加者：10名

導入部分は一言自己紹介～2人ペアで他己紹介（自分のことを各自説明し、その後他己紹介を3分間で発表）を行い、演劇のつくり方のひとつとして、人とコミュニケーションをとる内容を3パターン実施。①モデルの顔の特徴をペアに伝え、紙に顔を描いてもらう。②身体を使つての表現。（個々の表現から始まり、最後は一つの言葉を全員で表現する。）③講師が出題した「ことば」に関して、身体を使つて視覚情報を表現して次の人に伝える伝言ゲームを行う。（例：アメリカ、海水浴）

<参加者感想より>

「言葉でも、ジェスチャーでも、他の人に伝えるのは難しいということがわかった。わからなくてもおもしろかった」

「今後は、演劇として仕上げて、発表の場があるといいなあと思いました」



プログラム詳細

一般向けワークショップ「あなたのところをくすぐる えんげきワークショップ」
9月28日（金）19：00～21：00 会場：魚沼市小出郷文化会館大ホールステージ
参加者：8名

参加者の中に演劇経験者がいるため、脚本作りを中心に据えたワークショップとして実施。一つのシチュエーションから舞台設定を段階的（登場人物・場所・背景・問題・1シーン）に決めたあとに、構想をシャッフルして別の人がセリフやト書きを作成する。その後、別の複数人数でセリフを読み演じてみる体験を行った。

<参加者感想より>

「作り手になる。演じる人になる。その両方を短時間にしかも濃密に体験することができて、楽しかったです。今日、初めて会った人たちの日常をちょっとのぞいてみたような気がして、近しい気持ちになりました。こんなふうに初対面の人をすぐに語りあえるのはステキですね！」

「演じる側でなく、作る側を経験して、おもしろさを発見しました。どんなふうにと書くと、面白くなるかを考えるとワクワクしますね」



●この事業への参加動機

- ・当館は、いきいきとした子どもたちの感性を磨く場として、文化により地域を創造し発信していくため、自主事業や地域コミュニティ協議会との連携によるサロンコンサート、学校招待公演及び訪問プログラムを実施しているが、演劇ワークショップの取り組みが非常に少なく、参加者の新たな面を発見する機会を提供したいと思った。
- ・会館フランチャイズ団体としてミュージカル活動はあるが、開館から育成していた劇団が後継者・指導者の変更で存続できず消滅したため、地元劇団がなくなってしまった。また、地元高校演劇部の活動も活発ではなく、市民が演劇にかかわる機会が激減してしまい、集客の面で、自主事業の演劇企画実施が困難になった。今回の演劇的手法によるワークショップを実施することにより、演劇企画を再構築するきっかけとしたい。
- ・管理団体の変更に伴い、今まで会館とあまり縁がなかった地域の人に対して会館の活動を広報していくためのツール、さらに芸術文化に様々な世代が関われるチャンネルとして、地域や学校教育現場との連携を密にし、指導者の育成に寄与し、また地域の人と人をつなぐ方法を模索する。

●企画・実施において苦勞した点

- ・近隣の高校演劇部が活動休止や廃部決定などにより、アプローチしたい対象に対して混迷してしまい、実施企画が二転三転してしまった。
- ・9月一般向けワークショップ会場は当初館外会場を予定していたが、取組み内容が変更になったため、会場規模がワークショップ内容と合致しなくなってしまい、講師陣との事前下見や打合せに関して修正が必要になった。
- ・子どもの感性を磨くという当館のコンセプトに沿った、学校へのアウトリーチ訪問はすぐに決定したが、一般向けや会館職員や管理関係者へのインリーチ取組みに関して、演劇はハードルが高いという認識に対して、協力予定者との関係作りがスムーズに進展しなかった。

●プログラムを実施した成果

- ・学校への演劇ワークショップは、前回の「公共ホール演劇ネットワーク事業」の実施や過去演劇ワークショップの実績経過が実施校で高評価を得ていたため、積極的な受け入れと児童たちの新たな魅力発見へとつながった。
- ・教職員向けのワークショップを行ったことにより、演劇ワークショップへの理解、協力者との関係作りのきっかけができた。
- ・ハードルが高いと判断されている演劇ワークショップに対する考え方は会館職員及び関係者へのインリーチが実現できなかったため、意識改革へはつながらなかったが、一般向けワークショップへの参加者からは身近なものとして共通認識ができ、更なるワークショップへの期待を受ける事ができた。

●今後の展望

- ・地域の人々が幅広いジャンルの芸術文化に触れる機会を推進するため、会館自主事業の学校連携事業、学校訪問プログラムに演劇ワークショップ企画として実施継続可能にするか、演劇ジャンル企画を本公演やワークショップを組み込んだ総合的企画として実施できるような取り組みを模索する。
- ・今回のリージョナルシアター事業でアプローチした関係団体（小学校、行政、社会福祉団体、市内高校）や個人に対して、さらにホールの事業に興味を持ってもらう文化会館の事業や演劇WSへの理解促進を図り、継続的に参加していただける人材、協働できる人材への展開や発掘に努める。
- ・アーティストを派遣できるホールの芸術文化振興としての役割を明確にするとともに、スキルやテクニクを身につけるワークショップと想像力や心に刺激を与える演劇的ワークショップの区別について整理し、各ワークショップを地域や学校・行政関係者などに効果的に提供できるシステムを構築する。

地域における演劇教育

田上 豊

魚沼市にある小出郷文化会館とは、一昨年前に旅公演で回った「公共ホール演劇ネットワーク事業」（通称演ネット）『青木さん家の奥さん』以来の二度目のお付き合いとなりました。演ネットの公演で訪れた際は、季節が冬の真っ只中で積雪の地方らしい白銀の世界だったことを思い返します。この度の滞在は秋、まるで違う場所に来たのではないかと錯覚するほど風景が違って見えました。四季の織りなす景観を持つ場所、それが魚沼です。さらに水がいいので、良き米が育ちます。

小出郷文化会館の劇場職員である姉崎さんは、普段は程よく天然系な方でしたが、その実、劇場が地域に対して何が貢献できるのかを常に考えている方で、日々切磋琢磨されているという印象を受けます。姉崎さんの企画はとてもシンプルかつ実直なもので、「地域の教育現場を演劇の力で盛り上げたい、今回はそのための足がかりを作りたい」というものでした。そのために我々は、学校アウトリーチを数多く行い、さらなる理解を広げるために地域の教職員に向けてもアウトリーチを敢行。アウトリーチに出向いた先の校長先生が表現教育に理解のある方で、その校長先生のご協力でも教職員向けのアウトリーチがスムーズに企画されたのもとても幸運なことでした。教職員向けのアウトリーチでは30名近く人が集まり、リージョナルのアドバイザーとして参加されていた南河内万歳一座の内藤裕敬さんにもお力添えをいただいて、座学の概論→実際に体験する、という流れで重厚なアウトリーチを展開することができたと思います。

これからの教育現場では、創造性やコミュニケーション能力の向上を目的とした形で本格的に演劇が取り入れられようとしています。そういった意味においても概論からスタートした今回の教職員向けのアウトリーチは、演劇教育研修の雛形となるようなプログラムだったのではないのでしょうか。さて、全てうまくいきました、という感じでまとめるのもいけないので、魚沼でも起きてしまった「演劇ワークショップ募集チラシ」作成時のエピソードについて書き記したいと思います。

募集チラシを作成する際、「演劇」というワードを使用すると人が集まりにくいので「演劇」を外しても良いかという相談がありました。これは全国どこでもよく言われます。みなさん、地域性を考えてのご発言だと思います。しかし、このワードを省くと内容の不明瞭さを招きます。例えば、「表現で遊ぼう～演劇編～」といった感じで副題としてでもなんでもとにかく入れておけば良いのだと思います。要は、参加者への適切な情報提示が必要不可欠であり、それを省くと誤解を招く危険性があるということです。

次に、コピー文について。こちら魚沼では吟味いたしました。演劇ワークショップの種類にもよりますが、短期のワークショップにおいてはせいぜい長くても三時間程度のものがほとんどです。そのため、「プロの演技の技術をすぐに身につけられる」、「大きな声が出せるようになる」、「コミュニケーション能力が即座にアップ」といったように安易な技術取得を謳うものや、「心を解放する、新しい自分に出会える」といった自己啓発活動に近い文言を大体的に打ち出すのは危険です。あくまで、実施するアーティストのワークショップの内容を加味し、妥当な言葉で募集の言葉に落とすこと。それが真摯な態度だと考えています。募集文言と実施内容に乖離が起きるとクレームが噴出することがありますので、リスクマネジメントの観点からも提言しておきたいと思います。

最後に、今回の魚沼リージョナルが、「地域の教育現場を演劇の力で盛り上げるための足がかり」になれたのかは、今後の小出郷文化会館の尽力にかかっていると思います。姉崎さんの奮闘も心より願っています。また魚沼に行きたいです。何故ならば、次こそは川魚の釣りをしたいからです！

小牧市市民会館（愛知県小牧市）実施データ

実施団体	一般財団法人 こまき市民文化財団
実施ホール	小牧市市民会館
担当者	跡見由美、佐藤美子
派遣期間	下見派遣 平成30年11月8日（木）～11月9日（金） 1回目派遣 平成31年1月31日（木）～2月3日（日） 2回目派遣 平成31年2月14日（木）～2月17日（日）
アーティスト等	アーティスト：福田修志 アシスタント：松本恵、田中俊亮
<p>■下見派遣内容</p> <p>11月8日（木）公募ワークショップ企画内容の打合せ ワークショップ会場下見・打合せ（小牧南小学校）</p> <p>11月9日（金）ワークショップ打合せ・チラシ検討・会場下見・小牧山視察（ワークショップ「小牧・長久手の戦い」の参考）</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>1月31日（木）打合せ、意見交換会</p> <p>2月1日（金）小牧南小学校ワークショップ（5年1組、5年2組） インリーチ（財団職員対象）</p> <p>2月2日（土）親子向けワークショップ「福は来るのか?! 親子で本気の豆合戦！」 小学生以上ワークショップ「THE IKUSA 家康 VS 秀吉 現代版小牧・長久手の戦い！」</p> <p>2月3日（日）打合せ</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>2月14日（木）ワークショップ打合せ</p> <p>2月15日（金）小牧南小学校ワークショップ（5年3組、5年4組） 終了後学校との振り返り</p> <p>2月16日（土）ワークショップ参加についてのPR活動（子育て支援センター他） ワークショップ「うわ～！イヤイヤ期がやってきた!!」</p> <p>2月17日（日）フィードバック</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣				
	11月8日	11月9日	1月30日	2月1日	2月2日	2月3日	2月14日	2月15日	2月16日	2月17日	
8:00	移動	会場下見 打合せ	移動	小牧南小学校① 8:45～10:25	福は来るのか?! 親子で本気の豆 合戦 10:00～12:00	振り返りと 2回目 WSの打合 わせ	移動	小牧南小学校③ 8:45～10:15	小牧南小学校④ 10:35～12:05 学校との振り返り ～12:30	フィード バック	
9:00											
10:00											
11:00											
12:00	移動	小牧山視察	移動	小牧南小学校② 10:45～12:25	THE IKUSA 家康 VS 秀吉 現代版 小牧長久 手の戦い 14:00～17:00	移動	WS 打合せ	WS 広報活動 子育て支援センター 14:00～15:00 打合せ ～16:30	うわ～！ イヤイヤ期が やってきた!! 14:00～16:00	移動	
13:00											
14:00											
15:00											
16:00	打合せ	移動	打合せ 会場下見	インリーチ 18:00～19:00	意見交換会						
17:00	小牧南小学校 下見										
18:00											
19:00											
20:00											
21:00											

プログラム詳細

小牧市南小学校5年生ワークショップ

2月1日（金） 8：45～10：25（5年1組）／10：45～12：25（5年2組）

2月15日（金） 8：45～10：15（5年3組）／10：35～12：05（5年4組）

参加者：31名（5年1組）／32名（5年2組）

30名（5年3組）／30名（5年4組）

会場へ入ってくる子どもたちの表情は幾分緊張しているように見えたが、「宝探し」の劇が始まると表情は一転。福田さんの質問に元気よく答える子どもたち。その後の体と頭のストレッチでは、笑い声が。みんなで一つの輪になって、見えないボールを渡す、という課題に、一人ひとりの工夫や個性が表れ、ここでも笑顔が見られ楽しそう。

後半は「物語を生み出すワークショップ」。3グループに分かれた子どもたちは、各々が引いた、名前と性格のカードの人格になって、ストーリーを作りました。徐々にみんなの頭がくっつくほど輪が縮まり、集中して作っている姿が印象的です。

発表はどのグループも創意に富み、意外な展開に聞いている大人も子どもも、感嘆の声や笑い声があふれました。

自分と違う何者かになってみる、他者を想像するという体験を楽しんでいる姿が印象的でした。



職員対象インリーチ

2月1日（金） 18：00～19：00

会場：小牧市市民会館 リハーサル室2

参加者：22名

財団職員を対象に、小学校で行った「物語を生み出すワークショップ」に挑戦しました。比較的年齢層の高い職員ではありましたが、自分のひいた名前と性格になりきって、物語を作るというミッションに悪戦苦闘しながらも、福田さんやアシスタントお二人の適切なアドバイスもあり、3グループそれぞれの特徴の出た物語が完成しました。

発表ではセリフがとても上手な職員にみんなびっくりしたり、写真の奇想天外な見立てに感心したり、意外な性格を与えられた人のセリフに笑ったり、ぴったりの役の職員の体当たりの演技に大爆笑が起こったり。

普段と異なる頭の使い方に、終了後は心も晴ればれとし、充実した時間を過ごしました。



プログラム詳細

親子向けワークショップ「福は来るのか?! 親子で本気の豆合戦!」

2月2日(土) 10:00~12:00

会場;小牧市公民館 講堂

参加者:29名

福田さんとアシスタントの自己紹介に始まり、準備運動で心と身体をほぐした後、地域によって異なる節分の行事についてそれぞれの地域のやり方を話し合ううち、和気あいあいとした空気になってきました。

豆合戦のルール説明を行い、鬼チームと人間チームの二つのチームに分かれて、鬼チームは防御のための金棒を、人間チームは武器となる豆球を新聞紙で作りました。鬼は豆球を当てられたら退場。人間は鬼に触られたら退場。鬼は新聞紙で防御のよらい(?)を作るなどこちらの予想しなかった作戦を展開します。試合が始まると、まあ大騒ぎ。審判は判定が大変。豆球を新聞紙で仰いで防ぐ鬼が大活躍。作戦会議を挟み、大人も子どもも一緒になって防御の方法を考えたり、また役割を変えたりして、大変な盛り上がりでした。



一般向けワークショップ「THE IKUSA 家康VS秀吉 現代版 小牧・長久手の戦い!」

2月2日(土) 14:00~17:00

会場:小牧市公民館 講堂

参加者:29名

アーティストと参加者の自己紹介から始まりました。その後心と身体をほぐすコミュニケーションゲームを行い、空気が温まったところで、ワークショップの説明がありました。

ふんだんにあるダンボールで刀や、鎧、兜を作りました。親子での参加が多かったのですが、自分のものは自分で作ることを原則としながらも、子どもたちは力の足りない部分を大人に手助けしてもらい、自分の作りたかったものをイメージして真剣に取り組みました。中には、自分のなりたい武将の絵のある本をみて、忠実に再現を試みる子どももいました。

後半は合戦の再現です。配役を志願により決めていきます。人気の武将には希望が殺到し、福田さんがじゃんけんや手を挙げるのが早い人等で決めていきました。

最後は小牧・長久手の戦いを追体験。犬山城の戦いから仏ヶ根の戦いを追いながら、その時の武将の気持ちを想像して発表しました。



プログラム詳細

ワークショップ「うわ～！イヤイヤ期がやってきた！！」

2月16日（土）14：00～16：00

会場：小牧市市民会館 リハーサル室2

参加者：2名

参加者が2名と少数だったため、職員も参加して行いました。初めに全員の自己紹介を行い、参加者と福田さんの「我が家のイヤイヤ期」の状況を話しました。

その後コミュニケーションについて、自分が伝えたいことだけでなく、相手の伝えたいことを受信することの大切さについてのお話の後、「何とか席を立たせる」「席に座らせる」等、相手を動かすにはどのように話すことが有効かを二人一組で行い「相手を受け入れて自分の意見を言う」という事を頭に置いたコミュニケーションに挑戦しました。

またお題を用意して、その言葉が出てくるまでとにかく「イヤだ、イヤだ」と言い続け、相手の立場になってその言葉を考え、言われてうれしい言葉を想像する、というゲームを行いました。子どもが「イヤだ」という気持ちの根っこを想像するという事がイヤイヤ期を乗り切るひとつの手がかりになる事を体験しました。



●この事業への参加動機

こまき市民文化財団は、平成29年度に立ち上がったばかりの新しい財団です。そのため、第一にアウトリーチ実施のノウハウを獲得したいという思いがありました。小牧市には、中部フィルハーモニー交響楽団があるため、音楽についての事業は比較的手厚く実施されていましたが、演劇というジャンルへの取り組みが遅れているという現状もありました。そのような事情を踏まえ、この事業に参加することで、演劇的な手法を用いたワークショップへの理解を深め、財団として実施する力をつけることが大きな参加動機でした。さらに学校等においては、少人数でワークショップを実施するというこの事業の取り組みについて、その効果を実感していただくこと、「表現することの楽しさ、大切さ」の理解を深めることも重要な目的としてありました。

●企画・実施において苦労した点

企画については、初めての演劇的手法を用いたワークショップの実施、という事をアーティストサイドにご理解いただき、学校へのアウトリーチをメインに置き、親子向けワークショップをいくつか実施するという内容で進めていきました。これは劇場に親子を含む若い世代に来てほしいという財団の思いを汲んだものですが、学校に受け入れていただく難しさを感じました。校長会での説明や細かい資料提供等ではなかなか手を挙げていただくことができず、ピンポイントでお願いをしてやっと受け入れていただく先が決まりました。その学校も、学年全部が平等に受けることが条件となっていたため、4コマをすべて同じ学校で実施しました。また「うわ～！イヤイヤ期がやってきた！」については、参加者が集まらず苦労しました。

●プログラムを実施した成果

小学校へのアウトリーチは、子どもたちが様々な与えられたシチュエーションをきっかけに、真剣に想像するという体験に没頭する様子を見て、他者の気持ちを想像する、他者に共感するという大切なことを体感したのではないかと、それが最も大きな成果であると感じました。

また一方で、学校でのワークショップの実施により、子どもたちの取り組む様子を目の当たりにすることで、私たち財団職員の理解のみならず、学校サイド、さらには見学に訪れた市の教育委員会にこの事業の効果を実感していただくことができた点が大きな成果でした。教育長自ら様子を見学に来られ、こういった取り組みを教員にも広げたらどうか等、大変肯定的な感想をいただいたことで、大きなバックアップを得たことも今後継続していくための、大きな成果ととらえています。

●今後の展望

まずは学校へのアウトリーチへの門戸が開かれたので、それを閉ざすことなく継続することが重要かと考えています。限られた人員で他に事業もたくさんある中、財団の大切なミッションとしてアウトリーチの精神を継続して形にしていくことが重要だと感じています。

私たち自らもこの事業で気づかされた、他者の気持ちを想像するコミュニケーションを身につけ、財団としてのノウハウを蓄積しつつ、理解者、協力者を増やしながら継続していきたいと思えます。

道しるべ

福田 修志

旅の始まり

『小牧』と聞いて、まず僕が思い浮かべたのが『小牧・長久手の戦い』。それだけの知識しかなく訪れた小牧市は、名古屋から1時間程度の位置にあり、芸術文化を楽しもうと思えば、名古屋まで少し足を伸ばすだけで様々なものが楽しめる。という、ある意味恵まれた環境とも言える地域なのですが、そういった状況だからこそ劇場として地域に出来ることは何かということ、2年目を迎えたこまき市民文化財団は試行錯誤していました。

学校へのアウトリーチは、早々に実施が決まっていたものの、その他のプログラムを何にするかという部分では、方向性を見つけるのに悪戦苦闘。大目標の「働き盛りの人達にどうやって劇場に来てもらうか？」ということは決まっていたのですが、「参加者が集まるかどうか不安…」と尻込みをしている部分が見受けられ、なかなか踏ん切りが付かない。結果的には「色々やってみよう」という試行錯誤の場にする事で決まり、三つのプログラムを立てました。『小牧・長久手の戦いを体感するWS』『豆合戦WS』『イヤイヤ期の子を持つ親向けWS』。親と子をキーワードに、小牧の人には何が響くのかを探る旅の始まりです。

地域に流れる歴史性と環境作り

その街の歴史を体感するというWSは、子供たちはもちろんのこと、大人でも再発見が出来る企画として有効です。小牧で実施したのは「小牧・長久手の戦い」を再現することでした。僕が歴史好きというのもあるのですが、財団の職員さんと歴史の話をした時の手応えが凄く大きかったこと、そして何よりこのプログラムが出来る場所は、小牧か長久手しかないことが決め手となり実施することに。

甲冑や刀、兜など、親子であれこれ言いながらの道具作りの時間や、歴史上の人物となり、当時の人間の気持ちを体感する時間は、予想以上に楽しんでいて良い時間に。同日開催（節分前日）の『豆合戦WS』も大盛況で、キャンセル待ちが出るほどの人気っぷり。人間チームと鬼チームに分かれての豆合戦は、大量の新聞紙が飛び交う白熱の戦いとなり、大人達が真剣に「負けたくない」と思考を巡らす姿が特に印象的でした。

予想以上に響いたこの二つの企画は、小牧の人の奥底に流れている歴史性を痛感するに十分な成果を得ました。

それとは対照的だったのが『イヤイヤ期の子を持つ親向けWS』です。インプロの「イエス・アンド」を使ったり、言葉を使わないコミュニケーションを試みたり、子供になってイヤイヤ言ってみたりといった内容だったのですが、子供同伴の参加にしなかったため、参加者を上手く集められず、企画の難しさを感じました。対象となる働き盛りの人達に、子育て世代ももちろん含まれているので、今後同様の企画をする上では、託児を準備するなどの参加しやすい環境作りの大切さを改めて感じるようになりました。ですがそれを感じられたということもまた一つの発見です。見つけた発見を修正し、実施して、また見つける。近道はなく、それを繰り返すことが大切だと思うのです。

これからの道

担当者を含め、財団職員の方々のモチベーションは高く、インリーチの参加率も非常に高い。小学校での演劇アウトリーチで実施するプログラムを職員の方々に体感してもらうというWSには、多くの方が参加し、それぞれ部署を越え、「これから自分達がすることは何なのか？」ということを共有出来ました。

今回の旅はこれで終わりですが、財団としての旅は始まったばかり。ですが、この方達なら、これから来る荒波をきっと乗り越えられる。そんな熱量を感じられたので、今後を期待しています。

ゆめたろうプラザ（愛知県武豊町）実施データ

実施団体	特定非営利活動法人武豊文化創造協会（NPO たけとよ）
実施ホール	ゆめたろうプラザ（武豊町民会館）
担当者	堀田美千代
派遣期間	下見派遣 平成30年7月18日（水）～7月19日（木） 1・2回目派遣 平成30年9月11日（火）～9月16日（日）
アーティスト等	アーティスト：田上豊 アシスタント：大池容子、川口大樹
<p>■下見派遣内容</p> <p>7月18日（水）ワークショップ会場下見、会館視察 町内視察（ワークショップの素材となる浦島太郎伝説のある神社等の見学） NPO たけとよ、芸術の魅力発信事業実行委員対象のインリーチ 企画WSの打合せ</p> <p>■1・2回目派遣内容</p> <p>9月11日（火）移動日 WS事前打合せ 9月12日（水）アシスタント講師の町内視察 武豊高校演劇部対象ワークショップ① 9月13日（木）武豊高校演劇部対象ワークショップ② 9月14日（金）武豊高校演劇部対象ワークショップ③ 9月15日（土）一般対象ワークショップ① 9月16日（日）一般対象ワークショップ②・武豊高校演劇部対象ワークショップ④合同ワークショップ・発表会 ※武豊高校演劇部対象のワークショップは4日連続のプログラム、一般向けワークショップは2日連続のプログラム（合同発表会を含む）</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1・2回目派遣					
	7月18日	7月19日	9月11日	9月12日	9月13日	9月14日	9月15日	9月16日
9:00	移動	打合せ	移動	町内視察			一般WS① 10:00～16:00	一般WS② 高校生WS④ 合同WS 茶話会 10:00～16:00
10:00								
11:00								
12:00								
13:00	町内視察	移動	事前打合せ	高校生WS① 15:40～17:40	高校生WS② 16:30～17:30	高校生WS③ 15:40～17:40		フィードバック
14:00								
15:00								
16:00	プログラム 打合せ							
17:00								
18:00								
19:00	インリーチ 19:00～21:00							移動
20:00								
21:00								

プログラム詳細

武豊高校演劇部ワークショップ「やわらかあたまところをつくる」1日目

9月12日（火）15：40～17：40 会場：ゆめたろうプラザ 練習室

参加者：18名

町内唯一の県立高校である武豊高校の演劇部1年生と2年生を対象に、武豊町にある浦島太郎伝説をモチーフとした劇を創作し、発表するプログラムを4日間の連続講座で行った。

前半は発想力を豊かにし、他人の創作に触れる体験をした。

紙に自分の好きな曲名を書き、他者がその曲名から浮かぶ背景や問題をストーリー仕立てにしていくゲームでは、自分一人では思いつかないような発想を他の部員から得ることで、他人と一緒に創作する楽しみを体験した。

後半はグループに分かれて各自で「浦島伝説に出てくる玉手箱が現代に現われたらどうなるのか」を考え物語を制作。互いの発想の違いに驚きながら、どの物語を劇にして演じるのかを話し合った。



武豊高校演劇部ワークショップ「やわらかあたまところをつくる」2日目

9月13日（水）16：30～17：30 会場：ゆめたろうプラザ 練習室

参加者：19名

1日目にグループで絞り込んだ話を元に物語の大筋を決め、発表の舞台となる場所を決めるために館内を散策した。

講師のアドバイスを聞きながら、物語に広がりを持たせ、発表に向けブラッシュアップを重ねていった。

生徒たちはどのグループも、他人の意見を否定することなく、創作にうまく取り入れていく様子が印象的であった。

発表の舞台探しの時間では、一つの部屋で、どこから出て、はけるのかを考えながら部屋を舞台に見立て、アイデアを出し合っていた。発表という一つの目標に向かい、限られた時間内で良いものを作りたいという気持ちが伝わってきた。

普段は劇場にあまり足を運ぶことのない高校生に、会館にどんな部屋があり、どのような使い方ができるのかを見てもらえる機会となった。



武豊高校演劇部ワークショップ「やわらかあたまところをつくる」3日目

9月14日（木）15：40～17：40 会場：ゆめたろうプラザ 練習室ほか

参加者 19名

3日目の前半は2日までに決めた台本をもとに配役を決め、実際に発表に使用する場所で、台本の読み合わせと立ち稽古を進めていった。自由な創作を楽しむ場の雰囲気ができ、グループ内ではメンバー同士の距離感が近くなり、活発な創作意見が出ていた。

後半は3グループに分かれ、それぞれの場所で脚本のストーリーと配役を理解し、セリフを暗記して発表に臨んだ。普段の部活動では見られない部員の熱演に笑いが絶えなかった。

また、普段は舞台スタッフとして活動し、演技の経験がない生徒が、初めて演技を発表する機会となった。他の部員から演技も上手く出来ていると、部内でも新たな発見となった。



プログラム詳細

一般公募ワークショップ「やわらかあたまところをつくる」

9月15日（土）10：00～16：00 会場：ゆめたろうプラザ 練習室ほか

参加者：14名

一般公募で集まった参加者は2グループに分かれ、高校生と同様、浦島伝説の玉手箱をモチーフに10分程度の現代劇を制作した。2日目の合同ワークショップでは、一般、高校生グループが即興劇を発表した。

前半は、初めて顔を合わす参加者が、一言で自分を表現する「一言自己紹介」などのゲームで緊張を解していった。

2グループに分かれての制作では、年代の違うメンバーから様々なアイデアが出され、互いの発想を尊重し、楽しみながら制作に取り組んでいた。

今まで演技をしたことがない人もいたが、経験者がタイミングを見ながら声をかけ、うまくリードして進めて行った。

発表に向けて、細かい小道具を作ったり、衣装を考えたり、高校生とはまた違う大人の発想力を駆使して、リアリティのある舞台を作り上げていった。



一般公募・高校生合同ワークショップ「やわらかあたまところをつくる」

9月16日（日）10：00～16：00

参加者：24名（一般14名、高校生10名）

最終日は一般公募と高校生の合同ワークショップとして、作りあげた作品を館内のさまざまな場所を舞台にして発表した。

各グループは午前中から、午後からの発表に向けて最後の仕上げに入り、立ち稽古、通し稽古を行った。

高校生も一般公募も同じ「玉手箱」を題材にした劇を創作したが、すべて同じ設定になることはなく、まったく違う4つの物語が完成した。

また、発表をする際に、会館のどの場所でどこから見てもらうかなどを考え、創作したものをよりベストな環境で見せようとする姿が見られた。

ワークショップ後の交流茶話会では、ワークショップの感想などを交え、世代を超えた交流をする機会となった。



●この事業への参加動機

この地域では音楽公演に比べて、演劇の公演は馴染が少なく、演劇の魅力を広く発信し、将来的には演劇を観る人や創る人を増やしていきたいと思っていた。

リージョナルシアター事業で、演劇の手法を使ったワークショップを地域の人を対象に行うことによって、演劇が特別な物ではなく、自分の生活の中に普通に存在するという感覚を持ってもらうための、ひとつのきっかけにしたいと考えた。また、地域のアマチュア劇団にとっては、プロの演劇人と出会うという経験は、組織の中に新しい風を吹き込むことになる。プロの演出家の協力を得て地域の演劇団体の演劇活動のモチベーションを上げ、さらに可能性を拡げていきたいと考えた。

●企画・実施において苦労した点

◆会館のミッションを見据えた対象者の設定

3年前から武豊町と協働で「舞台芸術の魅力発信事業実行委員会」を立ち上げ、演劇の魅力を発信する事業を行ってきた。継続して演劇ワークショップを実施することで、演劇の魅力発信だけでなく、人のネットワーク構築に手ごたえを感じてきた。リージョナルシアター事業としては、その実績を踏まえた上で、次にどのような人を対象にして行うべきか、なかなか決められず苦労した。何度も実行委員会を開いて話し合い、対象者として考えていた人たちへのワークショップの需要について、関係部署の町職員にも同席してもらい、現場の声を聞き、検討を重ねた。その結果、対象者は最も会館に足を運んでもらいにくい高校生と、リピーターはもちろん、新たな参加者を受け入れることができる一般公募に決まった。

多くの時間をかけて対象者を決めたが、リージョナルシアターについての事業目的を町の職員と共有し、新たな役場の課と繋がりを持てる機会となった。

◆連続ワークショップ実施の難しさ

高校生ワークショップは水曜から金曜まで3日間連続で行い、日曜日に一般公募のワークショップと合同で発表会を予定した。最初の3日間、高校生は部活動時間内での実施になったので、原則全員参加が見込めたが、日曜日は強制できないとのことで、どのくらいの人数が最終日に参加できるのか、未定のまま初日を迎えた。劇創作の連続ワークショップでは最終日に発表の場を作ることがあり、最終日の参加者数によって、発表までをプログラムに組むかどうか、内容と目標が大きく変わってしまう。しかし、プロの演出家の魅力を知らないまま高校生に出欠をきくより、魅力を感じてもらった上で判断してほしいので、あえて講師には無理をお願いした。

また、連続ワークショップは、参加者が日程を確保することが難しいという欠点があるが、連続で創作するがゆえ、参加者同士が仲良くなることができ、創作から発表までの体験ができることになる。実現するにあたっては、ワークショップの面白みや効果を、具体的に学校や参加者に理解してもらうための説得力・交渉力を持つことの大切さを感じた。

●プログラムを実施した成果

◆新しい人を受け入れる人材の育成

演劇の手法を使ったワークショップを3年継続してきて、リピーターの中から新しい参加者を受け入れる体制ができてきた。初めて演劇を体験するのに戸惑いがある人を見守り、声をかけてくれるサポーターのような存在の人が増えてきた。演劇のワークショップは一般的にハードルが高く感じられてしまいがちではあるが、こういったサポーターの人が増えることによって、新しい参加者を受け入れる環境が整っていくことに繋がれば良いと思う。

◆プロの演劇家との新たな出会い。

高校演劇部は学校の外からの指導を受ける機会がほとんどない。高校演劇部がプロの演劇人と出会い、即興でシナリオを作り演じた経験は部活動のモチベーションをアップし、新たなキャストの発掘にも繋がった。また、会館をワークショップの会場としたことで、高校生が今まで親しみがなかった会館へ来る時の敷居が下がった。会館に来れば、「ここには面白い人が集い、面白いことがある」ということも知ってもらえた気がした。

●今後の展望

今後も「舞台芸術の魅力発信事業実行委員会」と協働で演劇ワークショップや公演を継続し、ワークショップのリピーターが新たな参加者を呼び、受け入れていけるような環境を構築していきたい。

また、田上さんにアドバイスをいただいたように、NPO たけとよがコーディネーターの視点を持ち、地域のどんな人に、どんなアーティストと出会って欲しいかを見定める力をつけていくべきだと思う。

そのためには、地域にどんな人がいて、どんな問題に悩んでいるのか、会館内だけでなく、広く情報を集め、共有していくことも大切だと思う。

劇場の機能を生かし、アートで人を呼び込む

田上 豊

武豊町は、愛知県知多郡にある三河湾の臨海部に位置する港町です。沿岸部には工業地帯が広がっており、浦島太郎伝説の発祥の地とも言われています。町に点在する神社には、浦島太郎の乗った亀のお墓や、玉手箱が安置されているところもあり、とても味わいのある町でした。

今回、担当させていただいたゆめたろうプラザは、過去に地域創造大賞を受賞したことがある、地域創造にとっては常連館と言っても過言ではない劇場です。施設の管理運営も町から直接委託を受けたNPO団体が担っており、劇場や会議室などの稼働率も高く、地域に根ざした劇場であることが伺えます。「お金がないなら知恵を絞ってやる」という劇場職員の意識の高さがとても好印象でした。

さて、ゆめたろうプラザから出されたオーダーの一つに、高校生を劇場に呼び込みたいというものがありました。これは、全国いろいろ出向きますと結構耳にするお悩みですが、そもそもどの劇場にも中高生が全くいないわけではありません。テーブルのある休憩コーナーなどで中高生が勉強する姿は結構よく目にします。劇場で働く人たちにとっては、施設の中にいるのに、劇場の扉の先に入場してくれないことへの歯がゆさがあるのだと思います。そういえば、『天使にラブソングを』という映画の中で、教会からかつてない美声の賛美歌（コーラス）が聞こえてきて、地域住民が思わず教会に足を踏み入れてしまうシーンが出てきます。あのシーンでは、無関心だったものに対して突如興味を見出す民衆意識の変容と、それがコーラスという芸術の力によって引き出されているところが描かれています。中高生を劇場に呼び込みたいのならば、「近所の劇場は何やら面白いことをやっているらしい」という劇場に対する見方を変えられるような「何か」を継続的に企画したり実施したりすることも大切なのかもしれません。

ゆめたろうプラザが高校生を対象者に選んだのは、劇場の目と鼻の先に高校があったことと、さらにこの高校には演劇部があるというのが大きな要因でした。こんな好条件が揃っているのにこれまでコミットしなかったのが不思議なくらいです。すぐにコンタクトをとってもらい、高校生参加型のワークショップが企画されました。いざ招いてみると「地区大会では来たことがあるが、それ以外は劇場とコミットする方法がわからない」という率直な高校生たちの意見を聞きました。これは、劇場との距離感を如実に表しています。高校生たちは、劇場に対して、舞台を見る場所か、何かの催しで使う場所というくらいの認識だったのかもしれない。そこをどう打ち破るのが最大の焦点でした。

ワークショップのいいところは、参加型という特徴にあります。さらに言えば、あらゆる年齢層の人たちとの出会いの場になりうることも最大の利点です。劇場の機能として、「参加」と「出会い」を担保するのはとても重要なことです。ゆめたろうプラザのリージョナルでは、プロによる創作体験、劇場に集う大人たちとの出会いの二つを柱に、高校生たちにとって劇場に対する意識改革は可能かどうかを検証する取り組みだったと思います。結果としては、最後に行なった発表会やその後に設定された茶話会も大いに盛り上がりを見せ、大成功に終わったと感じています。この過程を経て、今後一人でも多くの高校生が帰りがてらフラッと劇場に立ち寄ってくれることを願っています。そして、その時には、『天使にラブソングを』の神父さんのように「教会（劇場）に足を踏み入れた民衆」に、ニコリと手招きしてくれることを期待しています。

鈴鹿市文化会館（三重県鈴鹿市）実施データ

実施団体	公益財団法人鈴鹿市文化振興事業団
実施ホール	鈴鹿市文化会館
担当者	工藤真里奈
派遣期間	下見派遣 平成30年5月15日（火）～5月16日（水） 1回目派遣 平成30年7月26日（木）～7月29日（日） 2回目派遣 平成30年9月6日（木）～9月9日（日）
アーティスト等	アーティスト：福田修志 アシスタント：松本恵、田中俊亮
<p>■下見派遣内容</p> <p>5月15日（火）打合せ（実施プログラムの内容について） 市内視察（文化会館周辺散策）、会場下見（美術工芸室・陶芸室・さつきプラザ）</p> <p>5月16日（水）市内視察（鈴鹿墨見学・伝統産業会館見学等） 打合せ（NPO こどもサポートさんと親子でホール探検について）</p> <p>■1回目派遣内容</p> <p>7月26日（木）鈴鹿墨レクチャー（進誠堂にて鈴鹿墨の使用方法等のレクチャー） 打合せ（栄小学校の校長先生、担任の先生との打合せ）</p> <p>7月27日（金）打合せ（庄内小学校の校長先生、担任の先生との打合せ） 学校職員対象アウトリーチ体験</p> <p>7月28日（土）親子でホール探検①②</p> <p>7月29日（日）フィードバック（1回目派遣実施プログラムについて） 打合せ（2回目派遣実施プログラムの内容について）</p> <p>■2回目派遣内容</p> <p>9月6日（木）打合せ（実施プログラムの準備、当日の流れ確認）</p> <p>9月7日（金）栄小学校アウトリーチ 庄内小学校アウトリーチ 伝える・伝わるワークショップ</p> <p>9月8日（土）スミズミまで楽しむまち歩きワークショップ フィードバック（全体）</p> <p>9月9日（日）フィードバック（全体）</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1回目派遣				2回目派遣			
	5月15日	5月16日	7月26日	7月27日	7月28日	7月29日	9月6日	9月7日	9月8日	9月9日
9:00				庄内小打合せ				栄小学校 アウトリーチ 8:45～10:25		
10:00		市内視察	移動		親子でホール 探検① 10:30～12:00	フィードバック			スミズミまで 楽しむ まち歩きWS前半 10:00～12:30	フィードバック
11:00							打合せ			
12:00	移動						移動			
13:00		会場下見								
14:00		市内視察	鈴鹿墨 レクチャー	アウトリーチ 体験 13:30～15:30	親子でホール 探検② 13:30～15:00		移動	庄内小学校 アウトリーチ 13:50～15:25	スミズミまで楽しむ まち歩きWS後半 13:30～15:00	移動
15:00	打合せ						打合せ			
16:00	市内視察		栄小打合せ	フィードバック					フィードバック	
17:00	会場下見	移動								
18:00										
19:00								伝える・伝わるWS 19:00～21:00		
20:00										
21:00										

プログラム詳細

「学校職員対象演劇アウトリーチ体験」

7月27日（金）13：30～15：30

会場：鈴鹿市文化会館 音楽室

参加者：12名

演劇アウトリーチを実施するにあたり、先生方の理解は必須ということで実施したインリーチ。市内小中学校、教育委員会関係者が集まりました。緊張感を持った会場でしたが、導入のアシスタントお二人による「宝探し」の劇やストレッチ、頭の体操をすることで自然と距離が縮まり、気づけば知っている人も知らない人も全員顔を合わせて笑えるような和やかな雰囲気になっていました。後半は「名前カード」「性格カード」が一人一人に配られ、お話を作る中で「私はおっとりな性格だからこう言うね!」「それいいね!」と、自分の想像力を膨らませ、他者の想像力にも触れることができました。一通りアウトリーチ体験した後は、フィードバックを行いました。「とてもいい経験だと思う」「こども達にも是非体験してほしい」等の感想がでました。また、実施から数週間後に回収したアンケートには「早速クラブでストレッチを活用しています。一緒に参加した先生と未だにあだ名で呼び合ってますごく近い存在になりました」と感想をいただきました。



「親子でホール探検～ヒミツのお話～」

7月28日（土）①10：30～12：00／②13：30～15：00

会場：鈴鹿市文化会館 けやきホール

参加者：①26名（子供14名大人12名）／②21名（子供11名大人10名）

同日に文化会館全体を使ってこどもが主役の「こどもフェスティバル」を開催し、その中の一つとして親子で楽しめるプログラムを実施しました。まず調光室や舞台裏等、普段入ることのできない場所を探検し、こどもも大人も興味津々でした。一通りホールを探検した後は、福田さんの考えたヒミツのお話を聞き、それぞれが探検した中でお気に入りの場所を選び、実際にお話を作りました。お話を作りながら楽しそうに喋る親子の姿や、親と子が別行動でこどもを心配しながらも自分のお話作りに夢中になっていくお母さんや、心配を余所にお話をどんどん作るこどもたちの姿が見られました。最後にはそれぞれが作った「ヒミツのお話」を発表しました。こども達の想像力豊かなお話で会場が笑顔になったり、大人の知的な面白いお話で笑いに包まれたり、感心の声が聞こえたり、大人もこどもも楽しんでいました。



プログラム詳細

栄小学校アウトリーチ

9月7日（金）8：45～10：25

参加者：38名（3年生）

自分の意見をはきはき言える児童が多く、大変元気の良いクラスでした。その中でバランスストレッチや物語作りは他者の事を考える、話を聞くという所が新鮮そうでした。普段からみんな元気なんだろうと思っていましたが、アウトリーチ後に学校の先生方とお話し、「吃音の児童が楽しんできはきと喋っていた。クラスの中で普段静かな子が発言していたり、いつもの教室内では見ることの出来ない姿が見れた」と先生方にしか分からない嬉しい様子を聴く事ができました。また、実施後に回収したアンケートには「自分たちで劇をまた作りたい」という感想がたくさんありました。



庄内小学校アウトリーチ

9月7日（金）13：50～15：25

参加者：30名（5年生11名、6年生19名）

栄小学校と同プログラムでの実施でしたが、学年が上になったことで全く違った色のワークショップになりました。発表された物語の内容は映画でありそうな壮大な内容ができていました。発表の際に「演技をして」という指示はなかったのですが、熱演を見せてくれた児童もいました。違うグループの発表を聞くのも大変楽しんでいました。最後の感想で「普段は皆の前でふざけていて、発表する場ではいつも緊張するけど、今日は皆と一緒に作ったから緊張しなかった」と感想を伝えてくれました。



「伝える・伝わるワークショップ～表現とコミュニケーションを考える～」

9月7日（金）19：00～21：00

会場：鈴鹿市文化会館 さつきプラザ

参加者：18名

一般公募で集った参加者は高校生～70代まで幅広い参加がありました。「PTA会長になるからもっとうまく伝えられるようになりたい」「学生時代、演劇部に入っていて講師が演出家で興味を持ちました」等、様々な参加理由がありました。アイスブレイクとしてストレッチやコミュニケーションゲームをしました。緊張感がほぐれた所で「言語」「身体」について考え、どちらかだけで伝えるのは難しいこと、同じ言葉を喋っているのに表情や身体の向きが違うことで伝わり方が違うことなどを参加者で学びました。最後に参加者の感想を聞くと「聞き上手になりたい」「自分の聞く事の弱さが分かった」など伝えることよりも伝わることの難しさを分かった上で、伝わり上手になろうという意識の参加者が多く見られました。



プログラム詳細

「鈴鹿墨×まち歩き スミズミまで楽しむ まち歩きワークショップ」

9月8日（土）10：00～15：00（途中1時間昼食休憩）

会場：鈴鹿市文化会館 美術工芸室・陶芸室

参加者：7名

鈴鹿墨を字を書く以外の方法で活用することで鈴鹿墨の良さを感じ距離を近づけること、まち歩きをすることで改めて自分の住む街のことや人のことを考えるきっかけ作りを目的とし実施しました。前半は、会館内でアイスブレイクをし、ストーリーを見つける練習をした後に、会館周辺をまち歩きしました。街に出て福田さんの目線から「なんでここはこうなってるの？」と疑問が飛び、参加者も改めて見慣れている景色について考えるきっかけになっていました。また、まち歩きをしながら「昔はこうだった」等、参加者同士での会話がはずんでいました。後半は、まち歩きで見つけたストーリーや景色を鈴鹿墨で描きました。墨を磨る動作や墨の香りで会場内一同癒される空間でした。鈴鹿墨の中でも色墨を使った絵は色の違いなど奥深いものでした。最後にストーリーを発表し、「そんなところ見つけられなかった」等、他者の発見や気づきを一緒に楽しみ共感する様子が印象的でした。



●この事業への参加動機

(公財) 鈴鹿市文化振興事業団は音楽事業に特化し、「吹奏楽フェスティバル」やさまざまなジャンルを集めた「鈴鹿の街音楽祭」、市内小学5年生を会館に集めて生オケクラシックを提供する「ときめきクラシック」等、次世代へ向けでも音楽事業に特化しています。一方演劇は1年に1回地元のNPO 団体であることもサポート鈴鹿と共催により演劇鑑賞事業をするかしないか、実施するとしても鑑賞型という演劇事業に乏しいところがありました。そんななか地域創造のリージョナルシアター事業をご紹介いただき、演劇ワークショップの存在を知り、まずは演劇ワークショップの需要・効果等を計りたいと思い参加しました。

●企画・実施において苦勞した点

実施プログラムを決めることに苦勞しました。全体研修会前に実施したい対象や目的は決めていたのですが、いざ打合せに入り福田さんに「何でそれをしたいの？」と聞かれるとうまく説明することができず言葉が見つかりませんでした。というのは過去の事業報告書を参考にしている、本当に鈴鹿市で必要な事、自分のやりたいことが発見できていませんでした。福田さんや地域創造さんにアイデアやアドバイスをいただきやっとのことで自分の言葉にできました。

スミズミまでまち歩きワークショップの参加者集めに苦勞しました。配布したチラシの内容では絵を描くことが一番伝わりやすく、直接お誘いした方には「絵が苦手だから…」と言われ内容について詳しく説明しました。アーティストさんからいただいた言葉以外にも、市民性を考慮したキャッチコピーを入れる等工夫が必要でした。

●プログラムを実施した成果

新たなネットワークがたくさんできました。また、主管課の文化振興課や教育委員会の方々に参加いただき、評価をいただいたこと、インリーチに参加いただいた先生に「うちの学校にも来てほしい」と言われたことは大変大きな成果です。継続的に実施するにあたって理解者を増やすことができました。鈴鹿墨は今回のワークショップで鈴鹿の誇る伝統工芸品だと実感し、今後もワークショップを展開してもっと広く知れ渡ればと考えています。このように来年度から実施したい事業がたくさん浮かぶようになったことも、自分自身一つの成果だと感じています。

小学校アウトリーチでは、外部からきた講師だからこそ教えられる創造や物の見方があるとフィードバックしました。他のワークショップでも同様で、そういった刺激を提供することで視野、未来が広がり、豊かな街づくりに繋がっていくのではと感じました。

●今後の展望

今回の参加動機として演劇ワークショップの需要・効果を計りたいとしておりましたが、需要も効果も抜群でした。今回の実施で小学校アウトリーチは教育委員会、現場の先生方にも大好評でしたので継続していきたいと考えています。何より、鈴鹿市文化振興事業団職員がその効果を目の当たりにし、続けていきたいと話しています。今後も演劇を取り入れたワークショップ等の事業を実施していきたいと思っています。

可能性のある一歩

福田 修志

地域と繋がり、応援する

「劇場を訪れる人の幅を増やしたい」という願いや、「いわゆる子育て世代になっている人たちに劇場に来て欲しい」という想いは、どこの劇場にもある悩みのような気がします。鈴鹿市にある鈴鹿市文化振興事業団は、そういった願いや悩みをなんとか解消すべく、今回の事業に正面から一緒に向き合いました。

会場となった鈴鹿市文化会館は、ホールと公民館が一体となっているような施設で、同じ建物にプラネタリウム館があるなど、一昔前だと「なんで劇場と公民館が一緒に…」と思うような施設かもしれませんが、劇場の役割が多様化した現在においては、やり方次第では時代に合っている施設であり、可能性を十分に感じさせてくれる施設でした。

というのも、地域の伝統工芸品である『鈴鹿墨』を応援したいという事業団側の熱意で、まち歩きと絡めたWSを実施したのですが、そのWSを行う上で、あまり利用されなくなったという工芸室が大活躍しました。演劇のWSでも活躍するのですから、美術のWSだと言わずもがな。それどころか、複数のアーティストを掛け合わせたWSなどが企画できたら、とても豊かな時間を創造し、提供することが出来ます。それこそが、地域と繋がり、伝統文化を応援する力になるのです。足し算でなく、かけ算で描いた繋がり、新しいコンテンツを生み出し、伝統文化の魅力を高めることにもきっと繋がるでしょう。

アーティストを利用する

これまで多くの市民に『観るためだけの場所』として存在していた劇場が『ワクワクする空間』という印象に変わり、距離感がグッと短くなるために実施した『ホール探検』のWSは、ただのバックステージツアーではなく想像力を用いることで、子供たちはもちろんのこと、大人たちにとっても、劇場に対する親近感を感じ取ってもらったと実感するに十分な笑顔で溢れていました。それこそが、アーティストが関わる意味だと思います。

「役割の多様化」や「交流の場」など、昨今言われている劇場の方向性に合った機能を、実は既に備えていても、上手く使い切れていなかったり、方法を見出すアイデアが浮かばなかったりという劇場があると思いますが、そんな時こそアーティストを使って下さい。丸投げは良くありませんが、行き詰まったり、違う角度の発想が欲しい時こそ、アーティストを利用して欲しいと思うのです。

育てることの大切さ

学校アウトリーチというのも、広がり考えた劇場のミッションとして、とても良いアーティストの使い方です。ただ、学校アウトリーチの場合は、劇場と学校との信頼関係を作る必要があるので、鈴鹿市では教職員対象のWSを実施しました。

これは継続した実施を考えているのであれば、特に有効だと思います。先生方に巻いた種が実るのが、いつになるかは分かりませんが、確実にその種は心に残り、花開きます。限られた人数での実施にはなりますが、そうした小さな積み重ねこそが大切なことで、「千里の道も一歩から」。事業団として進む道をしっかりと定めながら、着実に進んだ最初の一歩は、とても大きな財産として、これからの糧になっていくと信じています。

岡山県天神山文化プラザ（岡山県）実施データ

実施団体	公益社団法人 岡山県文化連盟
実施ホール	岡山県天神山文化プラザ
担当者	中川有加
派遣期間	下見派遣 平成30年5月17日（木）～5月18日（金） 1・2回目派遣 平成30年7月31日（火）～8月5日（日）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介
<p>■下見派遣内容</p> <p>5月17日（木）アウトリーチ先（久世エスパランド、旧遷喬尋常小学校）の下見、実施についての打ち合わせ 5月18日（金）アソシエイツアーティスト（大月ヒロ子氏）と面談 岡山市内（カルチャーゾーン）視察、天神山文化プラザ下見、実施についての打ち合わせ</p> <p>■1・2回目派遣内容</p> <p>7月31日（火）打ち合わせ、事前準備 8月1日（水）岡山シアターミーティング①パブリック編 ②エデュケーション編 8月2日（木）真庭アウトリーチ 昼の部、夜の部 8月3日（金）岡山シアターミーティング③アーティスト編 8月4日（土）岡山シアターミーティング④リージョナル編 8月5日（日）フィードバック</p>	

スケジュール

派遣回	下見派遣		1・2回目派遣					
	5月17日	5月18日	7月31日	8月1日	8月2日	8月3日	8月4日	8月5日
9:00								
10:00	移動	大月ヒロ子氏 と面談	移動	事前準備				フィード バック
11:00						準備		
12:00								
13:00		カルチャー ゾーン視察・ 天神山文化 プラザ下見・打 ち合わせ		WS① パブリック編 14:00～16:00	WS③歌！踊り！ 音楽！劇！ 14:00～16:00	準備	WS⑥ リージョナル編 13:00～17:00	移動
14:00								
15:00								
16:00	久世エスパラ ンド下見・打合 せ (真庭市)	打ち合わせ 事前準備						
17:00								
18:00								
19:00	移動		WS② エデュケーション編 19:00～21:00	WS④色んな 表現を楽しむ 19:00～21:00	WS⑤ アーティスト編 19:00～21:00			
20:00								
21:00								

プログラム詳細

岡山シアターミーティング①パブリック編

8月1日（水）14：00～16：00

会場：天神山文化プラザ 1F ホールホワイエ

参加者：13名

岡山県内のホールや文化施設、公民館にお勤めの方、各事業担当者の方を対象に実施。当館職員のインリーチも兼ねていたため、普段はホール事業の内容と密に接する機会が少ない職員も含め、13名が参加した。

前半は、演劇や劇場法の成り立ちに触れながら①演劇のもつミッションはなにか②演劇はどんな力をもっているのか③演劇の力を活かしてこれからどんなことができるのか④「地域の劇場」のもつミッションはなにか、などの問いについて、キラリふじみの事業紹介を中心に具体例を交えながら、レクチャーを受けた。

後半は、「岡山」の良いところ、悪いところについて参加者より聞き取りを行い、4日目のリージョナル編へとつながる課題を得た。参加者からは、様々な立場の方の意見や他都市の話、成功例を聞いた事が興味深かった、との感想をいただいた。

終了後、「この続きが気になる！」と、この回のみ参加だった方から、急遽最終日のワークショップに追加の参加申込みをいただき、まずは3日間6本の集中WSの幕開けとなった。



岡山シアターミーティング②エデュケーション編

8月1日（水）19：00～21：00

会場：天神山文化プラザ 1F ホールホワイエ

参加者：15名

教育に携わっている方々を対象に募集し、16名が参加した。幼稚園・小学～大学などの学校関係者の方や、教員志望の学生、演劇やダンス、音楽の部活の顧問の方など、若手からベテランまで様々な経験の方が集まる中、まずは教育と演劇の関係についてレクチャーを受けた。その後「失敗することを楽しんでください」という声掛けのもと、想像力と身体をふんだんに使ったワークに入った。

それぞれに解説をはさみながらの進行で、およそ6つの想像力を刺激するようなものを中心に行った。

ただワークを体験するのではなく、「なぜ」「どのようにして」ということを多田氏の言葉で理解しながらワークを実体験できたことで、そのつど体感しているワークの面白みや、ねらいを大いに楽しみながら理解できる場となった。

子供達への言葉がけのしかたや、「ワークなどをする際（大人は割り切れても）子供は日常の関係を引きずってしまう。まずは同じような意見が出そうな質問から始めてみて、だんだん別々になるようなものをチョイスしていく」という実践的な言葉の数々に、教員志望の学生が熱心にメモをとっていたのが印象的であった。

表現することは伝えること、演劇的手法で「いつもはできない発見」へ参加者をやわらかく導く講師の多田氏の姿勢そのものに感銘を受けた参加者も多く、アンケートには感謝の言葉や、今後の意欲が湧いた、とても励まされた、といった嬉しい声が寄せられた。



プログラム詳細

久世エスパスで表現ワークショップ「歌！踊り！音楽！劇！」

8月2日（木）14：00～16：00

会場：エスパスセンター ホワイエ

参加者：10名

真庭市にある久世エスパスランドさんの協力のもと、小学4年生から中学3年生を対象に8名が参加した。演劇的な手法を使ったワークショップは初めてというエスパスさんスタッフと天神山スタッフも入り混じってのワークとなった。

自己紹介から始まり、多田氏の「今日は皆が好きなことを使って2時間遊びます！」の言葉で、子供達のはにかみ笑いを浮かべた。ここでも「失敗を楽しんでね！」という声掛けのもと動き出す。つながり鬼ごっこをはじめいくつか全員で遊び、初対面の緊張をほぐす。心と身体がなじみ、打ち解けた良い頃合いで遊びが「伝える、伝わる」内容へ移行、チームでお題を表現するジェスチャー伝言ゲームとなった。言葉がなく、相手の表情や行為から物事を推測し読み取ることへの挑戦は少し難しく感じられたのか最初は恥ずかしがる様子の子もいたが、最後には澁刺とした表情で取り組んでいた。自らの‘伝えたい’が、相手に‘伝わった！’時、その嬉しい気持ちが、想いを表現する意欲や自発性へ繋がっていく過程が窺えた。

参加者から「普段人と話せない私でも自然になじめた。色々な人と関わった」「体で色々なことを表現するのが面白かった」という感想をいただき、演劇の手法を用い、遊びを通して相手との関係性を想像することを参加者の子供達がゆるやかに体験する場となった。



久世エスパスで表現ワークショップ「いろんな表現を楽しむ」

8月2日（木）19：00～21：00

会場：エスパスセンター ホワイエ

参加者：20名

募集対象を高校生以上としたところ、高齢層によるミュージカルが盛んな背景もあり、10代～60代20名と幅広い年齢層の参加者が集まった。

多田氏の「色々なコミュニケーションの方法をお渡しするので、それで遊んでもらいたい」という声掛けのもと、言葉を使わずに身体を使うワークから始まった。指をさしあう簡単な動きから始まり、形や風景を表現していくものへ徐々にステップアップ。その後、各々のタイミングで演技エリアへ入り、立つ・座る・移動する・日常の動作をやってみる等、シンプルだが自主性を求められるものへと展開した。

多田氏の「人間の状態やその場の出来事がそのまま表現になる」「自分の思っているようにならない。だけどそこが面白い」といった言葉を、参加者が素直かつ積極的に自身の中に落とし込み、集中して楽しむ様子がよく見て取れた。

表現を用いたワークショップへの参加が初めての方も多数おられ、「今までにない自分を出せた」「世の中の見方が変わったような気がする」等の感想をいただき、好評を博した。

また、ワーク指導者の育成を視野に入れ、他編の受講者へワーク風景の見学を呼びかけたところ、岡山、倉敷市内より2名が参加した。見学者より、参加者を丁寧かつ確実に導いていく多田氏の姿をみることで刺激を受け、翌日のワークショップへの参加意欲が高まったという感想をいただいた。



プログラム詳細

岡山シアターミーティング③アーティスト編

8月3日（金）19：00～21：00

会場：天神山文化プラザ 1F ホールホワイエ

参加者：22名

これまで天神山で開講してきたワークショップは、各分野の愛好者を対象にその技術力UPを目的としたものが多かった。今回は指導者側になる人材の育成を狙い開講した。地域で演劇やダンス、音楽などのパフォーマンスアートを行っている方を中心に30名が参加した。

参加者はWSという言葉についてレクチャーを受けた後、まずはワークを受ける側を体験した。最初は会場の中にある形を探すワークから始まり、徐々に探すものが感覚的なものへと変化した。その後、チラシのイメージに合う音楽を選曲するワークを体験した。ワーク間に、「見えないものが見えてくる」「見えるものを使って「気持ち」など見えないものを表現する」等、どのようなことを狙ったワークか解説を挟みながらの進行で、ワークを体験する前と体験した後で、視点がどのように変わるかを体感。

その後「WSを考える」ことに挑戦。年齢や経験、ジャンルも全く違う集まりや、年齢のみ近い集まりなど、それぞれ特徴あるチームで考えたワークを各発表時間10分間とし、参加者全員に向けて実施した。

普段は表現者として人前に立つが、自ら多人数を動かし指導する経験はないという参加者も多数おり、ワークの内容を考えて組み立てる事は勿論、その時その場に集まった人とワークを実践することの難しさも含め、大変新鮮で刺激的だったという声が寄せられた。



岡山シアターミーティング④リージョナル編

8月4日（土）13：00～17：00

会場：天神山文化プラザ 第2会議室

参加者：29名

今回の岡山シアターミーティングの総括的な位置にあたるWS。他編のWSを受講した方を中心に大学生、教員、地元アーティスト、文化人や文化施設職員、行政関係者など、年齢も所属も様々な22名が参加した。

前半は他都市の事業紹介を聞き、岡山県の文化振興ビジョンを全員で確認。その後「パフォーマンスアートでどんな事業展開ができるか？」という問いについて、具体例を交えながらレクチャーを受けた。

後半は5～7人グループで付箋ワークを行った。岡山の良し悪しを書き出した後、付箋をランク付けで整理、お互いに各チームの付箋を見て回った。さらに50年後を想定し、良いところは「これはなくなってしまうかもしれない」順に、悪いところは「これの為に皆が不幸になっているもの」順に付箋を整理した。順番が上位にあがってきているものを今後の課題として意識しつつ、「それをどうやって文化の力で解決するか？」という問いのもと、各グループ独自の文化振興ビジョンを考えた。話し合いは笑顔と熱気に溢れ、大変個性的なビジョンを発表することができた。

参加者からは、多くの人と岡山について考える機会をもて良かった、色々な世代やジャンルの人と話せて刺激になった、という感想をいただいた。また、後日、もっと話したかった、今後どうする！？という声もあげていただき、今後の可能性を感じる時間となった。



担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

天神山文化プラザでは、昭和42年より県内アマチュア団体の活動を支援する「土曜劇場」を、年間6～8公演程度実施しています。長らくその場を演劇活動の支援の場としていましたが、平成29年度よりダンスや音楽にも門戸を開きました。プラザと演劇には非常に深い縁があります。

現在、岡山県域に演劇愛好家は一定数いますが、その経験やノウハウを活かす場は少ないように感じられます。一方、学校教育現場などでは、ダンス、演劇等の専門家やコミュニケーションの専門家が不足しているという声もあります。両者をつなぎ、演劇の専門知識をもっている方が社会の中で活動するにはどのような方法があるか知識を得たく思い、応募いたしました。

●企画・実施において苦労した点

プラザでは、これまで演劇やダンス愛好家のための技術向上を目的としたワークショップは何度も実施しており、一定数のリピーター参加者もいます。しかし、この度の内容は技術向上の為のワークショップとは異なり、地域の各ジャンルの愛好者たちや教員関係者へ興味をもって貰えるように説明する事が難しかったです。

また、申込受付期間を過ぎてからも熱意あるお問い合わせを多数頂くなど、想定以上に人が集まり、人数調整や、参加者の事前の情報の把握が反省点となりました。

●プログラムを実施した成果

プラザは県の施設ですが、普段は拠点である岡山市（県南）を中心として事業を展開しています。アウトリーチの経験がなく県北との交流が少ない中、真庭市でのアウトリーチを実施できたことは、大きな収穫となりました。また県職員の方から大学生まで、様々なキャリア、年齢層の問題意識をもつ方が、同じ場を共有し共に考える作業ができたことで、お互いにより刺激と多くのヒントを得ることができたのではないかと考えております。同時に、ワークショップの終了と共に「楽しかった！」と体験して満足し、思考する事も終わってしまわず、参加者それぞれの中に何らかの課題が残り、考え続けてもらう事が大切だと感じています。

事業終了後の秋、この春大学卒業予定の参加者（教員志望）より「多田さんのワークを受けて、自分がやってきた演劇と目指している教育が初めて繋がりました。大学院へ進むことを決めました！」という報告を頂きました。

多田さんと地域創造のご担当者さまには、広い視野のワークをしてくださったこと、また、楽しく問題提起をしてくださったことを、心より感謝しております。

●今後の展望

今回のワークショップを踏まえ、来年度より土曜劇場の仕組みを見直していきます。地域の舞台愛好家はその魅力を体感するのみならず、各ジャンルの魅力を伝える側に立つことで、より創造性豊かな文化が活性化するような仕組みづくりを意識し、事業に取り組みたいと考えています。

今後も、天神山文化プラザに集う文化団体やアーティストの皆様の文化活動のパートナーとして、あらゆる人々と協力し、共に創る「共創」の場を目指していきたいと思っております。

社会にアートは必要か？

多田 淳之介

今年度の岡山県文化連盟とのリージョナルシアターは、天神山文化プラザでの連続プログラムと真庭市の市民ホールでのプログラムを実施しました。この事業に申し込まれた担当者の方が実施年には退職され新しい担当者との実施になりましたが、スムーズに引き継いでいただけたので非常に助かりました。

天神山文化プラザでのプログラムでは、最終目標を「岡山市内を中心とした県内で活動するアーティストの意識改革と教育施設、文化施設とのマッチング」とし、まずは施設職員向け、教育関係者向け、アーティスト向けのワークショップを別々に開催し、最終コマで各ワークショップに出席したメンバーに参加してもらう全4回の「岡山シアターミーティング」という枠組みのプログラムとなりました。真庭市でのワークショップも、地域の施設とアーティストのマッチングで行うワークショップの実例として、シアターミーティング参加者にも見学に来てもらえるようにしました。

前任の担当者もアーティストの意識改革について高い問題意識を持っていて、それは岡山だけではなく全国的な問題意識だと感じています。要するに「好きで演劇やってるのだけなのになんでワークショップなんかやらなきゃいけないの？」という問い、逆に施設側、教育関係者側にも「アートが何の役に立つの？」という問いの答えを見つけれられていない。個人的には双方に「社会というものはアートを含めて成立している」という前提を理解してもらう必要があると思います。社会にアートが必要なのではなく、アートが無かったら社会ではありません。人類史上ずっとそうでしたし今後もそうでしょう。

ここでいうアートとは、ゴッホとかシャパンとかピーター・ブルックの作品を指すのではなく、お絵かきとか、鼻歌とか、お化粧のことです。アートは社会生活の中で、楽しむため、自分であるために誰でもやる行為です。アートは当たり前の人間的行為で、それを超人間的に高めたものがアート作品です。

日本の教育過程では幼稚園まではお絵かきも自由に描くことが許され、音程を外しても音楽を楽しむことが許されています。自分を自分のままで楽しむことができるのがアートで、アートが人間に必要な所以です。しかし小学校以降は人間の顔を緑に塗ると怒られ、音程を外しても怒られ、超人間的行為を目指してアート作品を作ること＝アートという環境になってしまいます。その結果どうなっているかといえば、自分を自分のまま楽しむことができずに苦しみ、死んでしまうのです。アートがないと人は死にます。今も20分に1人が自殺しています。アートはプラスアルファの要素ではなくむしろ日本社会の欠損で、それによって社会的損失を生んでいる。超人間的な作品を鑑賞する場だけではなく、幼稚園以降にアートをアートとして担保できる場が必要なのです。

かなり今回のプログラムから話が逸れましたが、この話の延長線上にあるプログラムだったと思っています。アーティストとはそんな環境の中でもアートを自分の中に持ち続けられた人たちで、アートの場にはそういう人が必要なのです。

天神山プラザでは土曜劇場という地域のカンパニーに開いた上演プログラムの枠組みがあり、今回のリージョナルシアター事業を経て、今後は上演とセットでワークショッププログラムも開催してもらう計画もあります。是非、アート作品の鑑賞だけではないアートの場を開いてもらえたらと期待しています。

平成30年度リージョナルシアター事業報告書

発行・編集 ———— 一般財団法人地域創造

発行日 ———— 平成31年3月31日

